

坊っちゃん



夏
目
漱
石

親譲りの無鉄砲で小供の時から損ばかりしている。小学校に居る時分学校の一階から飛び降りて一週間ほど腰を抜かした事がある。なぜそんな無闇をしたと聞く人があるかも知れぬ。別段深い理由でもない。新築の一階から首を出していたら、同級生の一人が冗談に、いくら威張つても、そこから飛び降りる事は出来まい。弱虫やーい。と囁いたからである。小使に負ふさつて帰つて来た時、おやじが大きな眼をして二階ぐらいから飛び降りて腰を抜かす奴があるかと云つたから、この次は抜かさずに飛んで見せますと答えた。

親類のものから西洋製のナイフを貰つて奇麗な刃を日に磨いて、友達に見せていたら、一人が光る事は光るが切れそうもないと云つた。切れぬ事があるか、何でも切つてみせると受け合つた。そんなら君の指を切つてみると注文したから、何だ指ぐらいこの通りだと右の手の親指の甲をはすに切り込んだ。幸ナイフが小さいのと、親指の骨が堅かつたので、今だに親指は手に付いている。しかし創痕は死ぬまで消えぬ。

庭を東へ二十歩に行き尽すと、南上がりにいささかばかりの菜園があつて、真中に栗の木が一本立つてゐる。これは命より大事な栗だ。実の熟する時分は起き抜けに背戸を出て落ちた奴を拾つてきて、学校で食う。菜園の西側が山城屋という質屋の庭続いで、この質屋に勘太郎という十三四の倅が居た。勘太郎は無論弱虫である。弱虫の癖に四つ目垣を乗りこえて、栗を盗みにくる。ある日の夕方折戸の蔭に隠れて、とうとう勘太郎を捕まえてやつた。その時勘太郎は逃げ路を失つて、一生懸命に飛びかかってきた。向うは二つばかり年上である。弱虫だが力は強い。鉢の開いた頭を、こつちの胸へ宛ててぐいぐい押した拍子に、勘太郎の頭がすべつて、おれの袷の袖の中にはいつた。邪魔になつて手が使えぬから、無暗に手を振つたら、袖の中にある勘太郎の頭が、右左へぐらぐら靡いた。しまいに苦しがつて袖の中から、おれの二の腕へ食い付いた。痛かつたから勘太郎を垣根へ押しつけておいて、足掻をかけて向うへ倒してやつた。山城屋の地面は菜園より六尺がた低い。勘太郎は四つ目垣を半分崩して、自分の領分へ真逆様に落ちて、ぐうと云つた。勘太郎が落ちるときには、おれの袷の片袖がもげて、急に手が自由になつた。その晩母が山城屋に詫びに行つたついでに袷の片袖を取り返して來た。

この外いたずらは大分やつた。大工の兼公と看屋の角をつれて、茂作の人參畠をあらした事がある。人参の芽が出揃わぬ処へ藁

が一面に敷いてあつたから、その上で三人が半日相撲をとりつづけに取つたら、人参がみんな踏みつぶされてしまつた。古川の持つてゐる田圃の井戸を埋めて尻を持ち込まれた事もある。太い孟宗の節を抜いて、深く埋めた中から水が湧き出て、そこのいらの稻にみずがかかる仕掛けであつた。その時分はどんな仕掛け知らぬから、石や棒ちぎれをぎゅうぎゅう井戸の中へ挿し込んで、水が出なくなつたのを見届けて、うちへ帰つて飯を食ついたら、古川が真赤になつて怒鳴り込んで來た。たしか罰金を出して済んだようである。

おやじはちつともおれを可愛がつてくれなかつた。母は兄ばかり贔屓にしていた。この兄はやに色が白くつて、芝居の真似をして女形になるのが好きだつた。おれを見る度にこいつはどうせ碌なものにはならないと、おやじが云つた。乱暴で乱暴で行く先が案じられると母が云つた。なるほど碌なものにはならない。ご覧の通りの始末である。行く先が案じられたのも無理はない。ただ懲役に行かないで生きているばかりである。

母が病氣で死ぬ二三日前台所で宙返りをしてへつついの角で肋骨を撲つて大いに痛かつた。母が大層怒つて、お前のようなものの顔は見たくないと言ふから、親類へ泊りに行つてゐた。するとどうどう死んだと云う報知が來た。そう早く死ぬとは思わなかつた。そんな大病なら、もう少し大人しくすればよかつたと思つて歸つて來た。そうしたら例の兄がおれを親不孝だ、おれのために、おつかさんが早く死んだんだと云つた。口惜しかつたから、兄の横つ面を張つて大変叱られた。

母が死んでからは、おやじと兄と三人で暮してゐた。おやじは何にもせぬ男で、人の顔さえ見れば貴様は駄目だ駄目だと口癖のように云つてゐた。何が駄目なんだか今に分らない。妙なおやじがあつたもんだ。兄は実業家になるとか云つてしまつて、強してゐた。元来女のような性分で、するいから、仲がよくなかつた。十日に一遍ぐらいの割で喧嘩をしてゐた。ある時将棋をさしたら卑怯な待駒をして、人が困ると嬉しそうに冷やかした。あんまり腹が立つたから、手に在つた飛車を眉間に擲きつけてやつた。眉間に割れて少々血が出た。兄がおやじに言付けた。おやじがおれを勘当すると言つ出した。

その時はもう仕方がないと観念して先方の云う通り勘当されるつもりでいたら、十年来召し使つてゐる清という下女が、泣きながらおやじに詫まつて、ようやくおやじの怒りが解けた。それにもかかわらずあまりおやじを怖いとは思わなかつた。かえつてこの清と云う下女に氣の毒であつた。この下女はもと由緒のあるものだつたそうだが、瓦解のときに零落して、つい奉公までするようになつたのだと聞いている。だから婆さんである。この婆さんがどういう因縁か、おれを非常に可愛がつてくれた。不思議なも

のである。母も死ぬ三日前に愛想をつかした——おやじも年中持て余している——町内では乱暴者の悪太郎と爪弾きをする——このおれを無暗に珍重してくれた。おれは到底人に好かれる性でないとあきらめていたから、他人から木の端のように取り扱われるのは何とも思わない、かえってこの清のようにちやほやしてくれるのを不審に考えた。清は時々台所で人の居ない時に「あなたは真っ直でよいご気性だ」と貰める事が時々あつた。しかしおれには清の云う意味が分からなかつた。好い気性なら清以外のものも、もう少し善くしてくれるだろうと思つた。清がこんな事を云う度におれはお世辞は嫌いだと答えるのが常であつた。すると婆さんはそれだから好いご気性ですと云つては、嬉しそうにおれの顔を眺めている。自分の力でおれを製造して誇つてるよう見える。少々気味がわるかつた。

母が死んでから清はいよいよおれを可愛がつた。時々は小供心になぜあんなに可愛がるのかと不審に思つた。つまらない、廃せばいいのにと思つた。氣の毒だと思つた。それでも清は可愛がる。折々は自分の小遣いで金鍔や紅梅焼を買つてくれる。寒い夜などはひそかに蕎麦粉を仕入れておいて、いつの間にか寝ている枕元へ蕎麦湯を持つて来てくれる。時には鍋焼餡飴さえ買つてくれた。ただ食い物ばかりではない。靴足袋ももらつた。鉛筆も貰つた、帳面も貰つた。これはずつと後の事であるが金を三円ばかり貸してくれた事さえある。何も貸せと云つた訳ではない。向うで部屋へ持つて来てお小遣いがなくてお困りでしよう、お使いなさいと云つてくれたんだ。おれは無論入らないと云つたが、是非使えと云うから、借りておいた。実は大変嬉しかつた。その三円を蝦蟇口へ入れて、懷へ入れたなり便所へ行つたら、すぱりと後架の中へ落してしまつた。仕方がないから、のそのそ出てきて実はこれこれだと清に話したところが、清は早速竹の棒を捲して来て、取つて上げますと云つた。しばらくすると井戸端でざあざあ音がするから、出てみたら竹の先へ蝦蟇口の紐を引き懸けたのを水で洗つていた。それから口を開けて壱円札を改めた茶色になつて模様が消えかかっていた。清は火鉢で乾かして、これでいいでしようと出した。ちよつとかいでみて臭いやと云つたら、それじゃお出しなさい、取り換えて来て上げますからと、どこでどう胡魔化したか札の代りに銀貨を三円持つて來た。この三円は何に使つたか忘れてしまつた。今に返すよと云つたぎり、返さない。今となつては十倍にして返してやりたくても返せない。

清が物をくれる時には必ずおやじも兄も居ない時に限る。おれは何が嫌いだと云つて人に隠れて自分だけ得をするほど嫌いな事はない。兄とは無論仲がよくないけれども、兄に隠して清から菓子や色鉛筆を貰いたくはない。なぜ、おれ一人にくれて、兄さんには遣らないのかと清に聞く事がある。すると清は澄したものでお兄様はお父様が買ってお上げなさるから構いませんと云う。こ

れは不公平である。おやじは頑固だけれども、そんな依怙贔屓負はせぬ男だ。しかし清の眼から見るとそう見えるのだろう。全く愛に溺れていたに違いない。元は身分のあるものでも教育のない婆さんだから仕方がない。単にこればかりではない。贔屓目は恐ろしいものだ。清はおれをもつて将来立身出世して立派なものになると想い込んでいた。その癖勉強をする兄は色ばかり白くつて、とても役には立たないと一人できめてしまつた。こんな婆さんに逢つては叶わない。自分の好きなものは必ずえらい人物になつて、嫌いなひとはきつと落ち振れるものと信じている。おれはその時から別段何になると云う了見もなかつた。しかし清がなるなると云うものだから、やっぱり何かに成れるんだろうと思つていた。今から考へると馬鹿馬鹿しい。ある時などは清にどんなものになるだろうと聞いてみた事がある。ところが清にも別段の考へもなかつたようだ。ただ手車へ乗つて、立派な玄関のある家をこしらえるに相違ないと云つた。

それから清はおれがうちでも持つて独立したら、一所になる氣でいた。どうか置いて下さいと何遍も繰り返して頼んだ。おれも何だかうちが持てるような気がして、うん置いてやると返事だけはしておいた。ところがこの女はなかなか想像の強い女で、あなたはどこがお好き、麹町ですか麻布ですか、お庭へぶらんこをおこしらえ遊ばせ、西洋間は一つでたくさんですなどと勝手な計画を独りで並べていた。その時は家なんか欲しくも何ともなかつた。西洋館も日本建も全く不用であつたから、そんなものは欲しくないと、いつでも清に答えた。すると、あなたは欲がすくなくつて、心が奇麗だと云つてまた賞めた。清は何と云つても賞めてくれる。

母が死んでから五六六年の間はこの状態で暮していた。おやじには叱られる。兄とは喧嘩をする。清には菓子を貰う、時々賞められる。別に望みもない。これでたくさんだと思っていた。ほかの小供も一概にこんなものだらうと思つていた。ただ清が何かにつけて、あなたはお可哀想だ、不仕合だと無暗に云うものだから、それじゃ可哀想で不仕合せなんだらうと思つた。その外に苦になる事は少しもなかつた。ただおやじが小遣いをくれないには閉口した。

母が死んでから六年目の正月におやじも卒中で亡くなつた。その年の四月におれはある私立の中学校を卒業する。六月に兄は商業学校を卒業した。兄は何とか会社の九州の支店に口があつて行かなければならん。おれは東京でまだ学問をしなければならない。兄は家を売つて財産を片付けて任地へ出立すると云い出した。おれはどうでもするがよからうと返事をした。どうせ兄の厄介になる気はない。世話をしてくれることで、喧嘩をするから、向うでも何とか云い出すに極つている。なまじい保護を受けられ

ばこそ、こんな兄に頭を下げなければならない。牛乳配達をしても食つてられると覺悟をした。兄はそれから道具屋を呼んで来て、先祖代々の瓦落多を二束三文に売つた。家屋敷はある人の周旋である金満家に譲つた。この方は大分金になつたようだが、詳しい事は一向知らぬ。おれは一ヶ月以前から、しばらく前途の方向のつくまで神田の小川町へ下宿していた。清は十何年居たうちが人手に渡るのを大いに残念がつたが、自分のものでないから、仕様がなかつた。あなたがもう少し年をとつていらつしやれば、ここがご相続が出来ますものをときりに口説いていた。もう少し年をとつて相続が出来るものなら、今でも相続が出来るはずだ。婆さんは何も知らないから年さえ取れば兄の家がもらえると信じている。

兄とおれはかように分れたが、困つたのは清の行く先である。兄は無論連れて行ける身分でなし、清も兄の尻にくつ付いて九州下りまで出掛ける気は毛頭なし、と云つてこの時のおれは四畳半の安下宿に籠つて、それすらもいざとなれば直ちに引き払わねばならぬ始末だ。どうする事も出来ん。清に聞いてみた。どこかへ奉公でもする気かねと云つたらあなたがおうちを持つて、奥さまをお貰いになるまでは、仕方がないから、甥の厄介になりましようとようやく決心した返事をした。この甥は裁判所の書記でまず今日には差支えなく暮していたから、今まで清に来るなら来いと二三度勧めたのだが、清はたとい下女奉公はしても年來住み馴れた家の方がいいと云つて応じなかつた。しかし今の場合知らぬ屋敷へ奉公易えをして入らぬ氣兼を仕直すより、甥の厄介になる方がましだと思ったのだろう。それにしても早くうちを持ての、妻を貰えの、来て世話をするのと云う。親身の甥よりも他人のおれの方が好きなのだろう。

九州へ立つ二日前兄が下宿へ来て金を六百円出してこれを資本にして商買をするなり、学資にして勉強をするなり、どうでも随意に使うがいい、その代りあとは構わないと云つた。兄にしては感心なやり方だ、何の六百円ぐらい貰わんでも困りはせんと思つたが、例に似ぬ淡泊な処置が気に入つたから、礼を云つて貰つておいた。兄はそれから五十円出してこれをついでに清に渡してくれと云つたから、異議なく引き受けた。一日立つて新橋の停車場で分れたぎり兄にはその後一遍も逢わない。

おれは六百円の使用法について寝ながら考えた。商買をしたつて面倒くさくつて旨く出来るものじやなし、ことに六百円の金で商買らしい商買がやれる訳でもなかろう。よしやれるとしても、今のように人の前へ出て教育を受けたと威張れないからつまり損になるばかりだ。資本などはどうでもいいから、これを学資にして勉強してやろう。六百円を三に割つて一年に二百円ずつ使えば三年間は勉強が出来る。三年間一生懸命にやれば何か出来る。それからどこの学校へはいろいろと考えたが、学問は生来どれもこ

れも好きでない。ことに語学とか文学とか云うものは真平ご免だ。新体詩などと来ては二十行あるうちで一行も分らない。どうせ嫌いなものなら何をやつても同じ事だと思つたが、幸い物理学校の前を通り掛つたら生徒募集の広告が出ていたから、何も縁だと思つて規則書をもらつてすぐ入学の手続きをしてしまつた。今考えるとこれも親譲りの無鉄砲から起つた失策だ。

三年間まあ人並に勉強はしたが別段たちのいい方でもないから、席順はいつでも下から勘定する方が便利であつた。しかし不思議なもので、三年立つたらどうとう卒業してしまつた。自分でも可笑しいと思ったが苦情を云う訳もないから大人しく卒業しておいた。

卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だらうと思って、出掛け行つたら、四国辺のある中学校で数学の教師が入る。月給は四十円だが、行つてはどうだという相談である。おれは三年間学問はしたが実を云うと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかつた。もっとも教師以外に何をしようと云うあてもなかつたから、この相談を受けた時、行きましょと即席に返事をした。これも親譲りの無鉄砲が祟つたのである。

引き受けた以上は赴任せねばならぬ。この三年間は四畳半に蟄居して小言はただの一度も聞いた事がない。喧嘩もせずに済んだ。おれの生涯のうちでは比較的呑気な時節であつた。しかしこうなると四畳半も引き払わなければならん。生れてから東京以外に踏み出したのは、同級生と一所に鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。大変な遠くへ行かねばならぬ。地図で見ると海浜で針の先ほど小さく見える。どうせ碌な所ではあるまい。どんな町で、どんな人が住んでるか分らん。分らんでも困らない。心配にはならぬ。ただ行くばかりである。もっとも少々面倒臭い。

家を置んでからも清の所へは折々行つた。清の甥というのは存外結構な人である。おれが行くたびに、居りさえすれば、何くれと款待なしてくれた。清はおれを前へ置いて、いろいろおれの自慢を甥に聞かせた。今に学校を卒業すると麹町辺へ屋敷を買って役所へ通うのだなどと吹聴した事もある。独りで極めて一人で喋舌るから、こつちは困まつて顔を赤くした。それも一度や二度ではない。折々おれが小さい時寝小便をした事まで持ち出すには閉口した。甥は何と思って清の自慢を聞いていたか分らぬ。ただ清は昔風の女だから、自分とおれの関係を封建時代の主従のように考えていた。自分の主人なら甥のためにも主人に相違ないと合点したものらしい。甥こそいい面の皮だ。

いよいよ約束が極まつて、もう立つと云う三日前に清を尋ねたら、北向きの三畳に風邪を引いて寝ていた。おれの来たのを見て

起き直るが早いか、坊っちゃんいつ家をお持ちなさいますと聞いた。卒業さえすれば金が自然とポケットの中に湧いて来ると思つてゐる。そんなにえらい人をつらまえて、まだ坊っちゃんと呼ぶのはいよいよ馬鹿氣ている。おれは単簡に当分うち持たない。田舎へ行くんだと云つたら、非常に失望した容子で、胡麻塩の鬢の亂れをしきりに撫でた。あまり氣の毒だから「行く事は行くがじき帰る。来年の夏休みにはきっと帰る」と慰めてやつた。それでも妙な顔をしているから「何を見やげに買つて来てやろう、何が欲しい」と聞いてみたら「越後の笹飴が食べたい」と云つた。越後の笹飴なんて聞いた事もない。第一方角が違う。「おれの行く田舎には笹飴はなさそうだ」と云つて聞かしたら「そんなら、どつちの見当です」と聞き返した。「西の方だよ」と云うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。随分持てました。

出立の日には朝から来て、いろいろ世話をやいた。来る途中小間物屋で買つて来た歯磨と楊子と手拭をズックの革鞄に入れてくれた。そんな物は入らないと云つてもなかなか承知しない。車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじっと見て「もうお別れになるかも知れません。随分ご機嫌よう」と小さな声で云つた。目に涙が一杯たまつてゐる。おれは泣かなかつた。しかしもう少しで泣くところであつた。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だらうと思つて、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立つていた。何だか大変小さく見えた。

一

ぶうと云つて汽船がとまるど、解が岸を離れて、漕ぎ寄せて來た。船頭は真つ裸に赤ふんどしをしめている。野蛮な所だ。もつともこの熱さでは着物はきられまい。日が強いで水がやに光る。見つめていても眼がくらむ。事務員に聞いてみるとおれはここへ降りるのだそうだ。見るところでは大森ぐらいな漁村だ。人を馬鹿にしていらあ、こんな所に我慢が出来るものかと思つたが仕方がない。威勢よく一番に飛び込んだ。続づいて五六人は乗つたろう。外に大きな箱を四つばかり積み込んで赤ふんは岸へ漕ぎ戻して來た。陸へ着いた時も、いの一番に飛び上がって、いきなり、磯に立つていた鼻たれ小僧をつらまえて中学校はどこだと聞いた。小僧はぼんやりして、知らんがの、と云つた。氣の利かぬ田舎ものだ。猫の額ほどの町内の癖に、中学校のありかも知らぬ奴があるものか。ところへ妙な筒つぽうを着た男がきて、こつちへ来いと云うから、尾いて行つたら、港屋とか云う宿屋へ連れて來

た。やな女が声を揃えてお上がりなさいと云うので、上がるのがいやになつた。門口へ立つたなり中学校を教えろと云つたら、中学校はこれから汽車で一里ばかり行かなくつちやいけないと聞いて、なお上がるのがいやになつた。おれは、筒っぽうを着た男から、おれの革鞄を二つ引きたくて、のそのそあるき出した。宿屋のものは変な顔をしていた。

停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買つた。乗り込んでみるとマツチ箱のような汽車だ。ごろごろと五分ばかり動いたと思つたら、もう降りなければならない。道理で切符が安いと思つた。たつた三銭である。それから車を傭つて、中学校へ来たら、もう放課後で誰も居ない。宿直はちょっと用達に出たと小使が教えた。随分気楽な宿直がいるものだ。校長でも尋ねようかと思つたが、草臥れたから、車に乗つて宿屋へ連れて行けと車夫に云い付けた。車夫は威勢よく山城屋と云ううちへ横付けにした。山城屋とは質屋の勘太郎の屋号と同じだからちよつと面白く思った。

何だか二階の楷子段の下の暗い部屋へ案内した。熱くつて居られやしない。こんな部屋はいやだと云つたらあいにくみんな塞がつておりますからと云いながら革鞄を拋り出したまま出て行つた。仕方がないから部屋の中へはいつて汗をかいて我慢していた。やがて湯に入れと云うから、ざぶりと飛び込んで、すぐ上がつた。帰りがけに覗いてみると涼しそうな部屋がたくさん空いている。失敬な奴だ。嘘をつきやあがつた。それから下女が膳を持って來た。部屋は熱つかつたが、飯は下宿よりも大分旨かつた。給仕をしながら下女がどちらからおいでになりましたと聞くから、東京から來たと答えた。すると東京はよい所でございましょうと云つたから当り前だと答えてやつた。膳を下げた下女が台所へいった時分、大きな笑い声が聞えた。くだらないから、すぐ寝たが、なかなか寝られない。熱いばかりではない。騒々しい。下宿の五倍ぐらいやかましい。うとうとしたら清の夢を見た。清が越後の笹飴を笊ぐるみ、むしやむしや食つてゐる。笊は毒だからよからうと云うと、いえこの笊がお薬でござりますと云つて旨そうに食つてゐる。おれがあきれ返つて大きな口を開いてハハハハと笑つたら眼が覚めた。下女が兩戸を開けている。相変らず空の底が突き抜けたような天氣だ。

道中をしたら茶代をやるものだと聞いていた。茶代をやらないと粗末に取り扱わると聞いていた。こんな、狭くて暗い部屋へ押し込めるのも茶代をやらないせいだろう。見すばらしい服装をして、ズックの革鞄と毛繻子の蝙蝠巻を提げてるからだろう。田舎者の癖に人を見括つたな。一番茶代をやつて驚かしてやろう。おれはこれでも学資のあまりを三十円ほど懐に入れて東京を出でたのだ。汽車と汽船の切符代と雜費を差し引いて、まだ十四円ほどある。みんなやつたつてこれからは月給を貰うんだから構わ

ない。田舎者はしみつたれだから五円もやれば驚ろいて眼を廻すに極つてゐる。どうするか見ろと済して顔を洗つて、部屋へ帰つて待つてると、夕べの下女が膳を持つて來た。盆を持つて給仕をしながら、やににやにや笑つてゐる。失敬な奴だ。顔のなかをお祭りでも通りやしまいし。これでもこの下女の面よりよっぽど上等だ。飯を済ましてからにしようと思つてゐたが、癪に障つたから、中途で五円札を一枚出して、あとでこれを帳場へ持つて行けと云つたら、下女は変な顔をしてゐた。それから飯を済ましてすぐ学校へ出懸けた。靴は磨いてなかつた。

学校は昨日車で乗りつけたから、大概の見当は分つてゐる。四つ角を二三度曲がつたらすぐ門の前へ出た。門から玄関までは御影石で敷きつめてある。きのうこの敷石の上を車でがらがらと通つた時は、無暗に仰山な音がするので少し弱つた。途中から小倉の制服を着た生徒にたくさん逢つたが、みんなこの門をはいつて行く。中にはおれより背が高くつて強そうなのが居る。あんな奴を教えるのかと思つたら何だか氣味が悪くくなつた。名刺を出したら校長室へ通した。校長は薄鬚のある、色の黒い、目の大きな狸のような男である。やにもつたいぶつけていた。まあ精出して勉強してくれと云つて、恭しく大きな印の捺つた、辞令を渡した。この辞令は東京へ帰るとき丸めて海の中へ抛り込んでしまつた。校長は今に職員に紹介してやるから、一々その人にこの辞令を見せるんだと云つて聞かした。余計な手数だ。そんな面倒な事をするよりこの辞令を三日間職員室へ張り付ける方がましだ。

教員が控所へ揃うには一時間目の喇叭が鳴らなくてはならぬ。大分時間がある。校長は時計を出して見て、追々ゆるりと話すつもりだが、まず大体の事を呑み込んでおいてもらおうと云つて、それから教育の精神について長いお談義を聞かした。おれは無論いい加減に聞いていたが、途中からこれは飛んだ所へ来たと思つた。校長の云うようにはとても出来ない。おれみたような無鉄砲なものをつけまえて、生徒の模範になれる、一校の師表と仰がれなくてはいかんの、学問以外に個人の徳化を及ぼさなくては教育者になれないの、と無暗に法外な注文をする。そんなえらい人が月給四十円で遙々こんな田舎へくるもんか。人間は大概似たもんだ。腹が立てば喧嘩の一つぐらいは誰でもするだろうと思つてたが、この様子じやめつたに口も聞けない、散歩も出来ない。そんなむずかしい役なら雇う前にこれだと話すがいい。おれは嘘をつくのが嫌いだから、仕方がない、だまされて來たのだとあきらめて、思い切りよく、ここで断わつて帰つちまおうと思つた。宿屋へ五円やつたから財布の中には九円なにがししかない。九円じや東京までは帰れない。茶代なんかやらなければよかつた。惜しい事をした。しかし九円だつて、どうかならない事はない。旅費は足りなくつても嘘をつくよりも思つて、到底あなたのおつしやる通りにや、出来ません、この辞令は返しますと云つた

ら、校長は狸のような眼をぱちつかせておれの顔を見ていた。やがて、今のはただ希望である、あなたが希望通り出来ないのはよく知つてゐるから心配しなくつてもいいと云いながら笑つた。そのくらいよく知つてゐるなら、始めから威嚇さなければいいのに。

そう、こうする内に喇叭が鳴つた。教場の方が急にがやがやする。もう教員も控所へ揃いましたと云うから、校長に尾いて教員控所へはいつた。広い細長い部屋の周囲に机を並べてみんな腰をかけている。おれがはいつたのを見て、みんな申し合せたようにおれの顔を見た。見世物じやあるまいし。それから申し付けられた通り一人一人の前へ行つて辞令を出して挨拶をした。大概是椅子を離れて腰をかがめるばかりであったが、念の入つたのは差し出した辞令を受け取つて一応拝見をしてそれを恭しく返却した。まるで宮芝居の真似だ。十五人目に体操の教師へと廻つて来た時には、同じ事を何返もやるので少々じれつたくなつた。向うは一度で済む。こつちは同じ所作を十五返繰り返している。少しはひとの了見も察してみるがいい。

挨拶をしたうちに教頭のなにがしと云うのが居た。これは文学士だそうだ。文学士と云えば大学の卒業生だからえらい人なんだろう。妙に女のような優しい声を出す人だつた。もっとも驚いたのはこの暑いのにフランネルの襯衣を着ている。いくらか薄い地には相違なくつても暑いには極つてる。文学士だけにご苦労千万な服装をしたもんだ。しかもそれが赤シャツだから人を馬鹿にしている。あとから聞いたらこの男は年が年中赤シャツを着るんだそうだ。妙な病氣があつた者だ。当人の説明では赤は身体に薬になるから、衛生のためにわざわざ逃らえるんだそうだが、入らざる心配だ。そんならついでに着物も袴も赤にすればいい。それから英語の教師に古賀とか云う大変顔色の悪い男が居た。大概顔の蒼い人は瘠せてるもんだがこの男は蒼くふくれている。昔小学校へ行く時分、浅井の民さんと云う子が同級生にあつたが、この浅井のおやじがやはり、こんな色つやだつた。浅井は百姓だから、百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじやありません、あの人はうらなりの唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんですけど教えてくれた。それ以来蒼くふくれた人を見れば必ずうらなりの唐茄子を食つた酬いだと思う。この英語の教師もうらなりばかり食つてゐるに違ひない。もつともうらなりとは何の事か今もつて知らない。清に聞いてみた事はあるが、清は笑つて答えなかつた。大方清も知らないんだろう。それからおれと同じ数学の教師に堀田というのが居た。これは逞しい毬栗坊主で、叢山の悪僧と云うべき面構である。人が町寧に辞令を見せたら見向きもせず、やあ君が新任の人か、ちと遊びに来給えアハハハと云つた。何がアハハハだ。そんな礼儀を心得ぬ奴の所へ誰が遊びに行くものか。おれはこの時からこの坊主に山嵐という渾名をつけてやつた。漢学の先生はさすがに堅いものだ。昨日お着きで、さぞお疲れで、それでもう授業をお始めで、大分ご励精で、――

とのべつに弁じたのは愛嬌のあるお爺さんだ。画学の教師は全く芸人風だ。べらべらした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて、お国はどちらでげす、え？ 東京？ そりや嬉しい、お仲間が出来て……私もこれで江戸っ子ですと云つた。こんなのが江戸っ子なら江戸には生れたくないもんだと心中に考えた。そのほか一人一人についてこんな事を書けばいくらもある。しかし際限がないからやめる。

挨拶が一通り済んだら、校長が今日はもう引き取つてもいい、もつとも授業上の事は数学の主任と打ち合せをしておいて、明日から課業を始めてくれと云つた。数学の主任は誰かと聞いてみたら例の山嵐であった。忌々しい、こいつの下に働くのかおやおやと失望した。山嵐は「おい君ここに宿つてるか、山城屋か、うん、今に行つて相談する」と云い残して白墨を持って教場へ出て行つた。主任の癖に向うから来て相談するなんて不見識な男だ。しかし呼び付けるよりは感心だ。

それから学校の門を出て、すぐ宿へ帰ろうと思つたが、帰つたつて仕方がないから、少し町を散歩してやろうと思って、無暗に足の向く方をあるき散らした。県庁も見た。古い前世紀の建築である。兵営も見た。麻布の聯隊より立派でない。大通りも見た。神楽坂を半分に狭くしたぐらいの道幅で町並はあれより落ちる。二十五万石の城下だつて高の知れたものだ。こんな所に住んでご城下だなどと威張つてる人間は可哀想なものだと考えながらくると、いつしか山城屋の前に出た。広いようでも狭いものだ。これで大抵は見尽したのだろう。帰つて飯でも食おうと門口をはいつた。帳場に坐つていたかみさんが、おれの顔を見ると急に飛び出してきてお帰り……と板の間へ頭をつけた。靴を脱いで上がると、お座敷があきましたからと下女が二階へ案内をした。十五畳の表二階で大きな床の間がついている。おれは生れてからまだこんな立派な座敷へはいった事はない。この後いつはいれるか分らないから、洋服を脱いで浴衣一枚になつて座敷の真中へ大の字に寝てみた。いい気持ちである。

昼飯を食つてから早速清へ手紙を書いてやつた。おれは文章がまづい上に字を知らないから手紙を書くのが大嫌いだ。またやる所もない。しかし清は心配しているだろう。難船して死にやしないかなどと思つちゃ困るから、奮発して長いのを書いてやつた。その文句はこうである。

「きのう着いた。つまらん所だ。十五畳の座敷に寝てゐる。宿屋へ茶代を五円やつた。かみさんが頭を板の間へすりつけた。夕べは寝られなかつた。清が笛餡を笛ごと食つて夢を見た。来年の夏は帰る。今日学校へ行つてみんなにあだなをつけてやつた。校長は狸、教頭は赤シャツ、英語の教師はうらなり、数学は山嵐、画学はのだいこ。今にいろいろな事を書いてやる。さようなら」

手紙をかいてしまつたら、いい心持ちになつて眠気がさしたから、最前のように座敷の真中へのびのびと大の字に寝た。今度は夢も何も見ないでぐっすり寝た。この部屋かいと大きな声がするので目が覚めたら、山嵐がはいつて來た。最前は失敬、君の受持ちは……と人が起き上がるや否や談判を開かれたので大いに狼狽した。受持ちを聞いてみると別段むずかしい事もなさそうだから承知した。このくらいの事なら、明後日は愚、明日から始めると云つたつて驚ろかない。授業上の打ち合せが済んだら、君はいつまでこんな宿屋に居るつもりでもあるまい、僕がいい下宿を周旋してやるから移りたまえ。外のものでは承知しないが僕が話せばすぐ出来る。早い方がいいから、今日見て、あす移つて、あさつてから学校へ行けば極りがいいと一人で呑み込んでいた。なるほど十五畳敷にいつまで居る訳にも行くまい。月給をみんな宿料に払つても追つつかないかもしね。五円の茶代を奮発してすぐ移るのはちと残念だが、どうせ移る者なら、早く引き越して落ち付く方が便利だから、そこのところはよろしく山嵐に頼む事にした。すると山嵐はともかくもいつしょに来てみろと云うから、行つた。町はずれの岡の中腹にある家で至極閑静だ。主人は骨董を売買するいか銀と云う男で、女房は亭主よりも四つばかり年嵩の女だ。中学校に居た時ウイッチと云う言葉を習つた事があるがこの女房はまさにウイッチに似ている。ウイッチだって人の女房だから構わない。とうとう明日から引き移る事にした。帰りに山嵐は通町で氷水を一杯奢つた。学校で逢つた時はやに横風な失敬な奴だと思ったが、こんなにいろいろ世話をしてくれるとこを見ると、わるい男でもなさそうだ。ただおれと同じようにせつかちで肝癩持らしい。あとで聞いたたらこの男が一番生徒に人望があるのでそうだ。

三

いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいって高い所へ乗つた時は、何だか変だつた。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思った。生徒はやかましい。時々団抜けた大きな声で先生と云う。先生には応えた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。何だか足の裏がむずむずする。おれは卑怯な人間ではない。臆病な男でもないが、惜しい事に胆力が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減つた時に丸の内で牛砲を聞いたような気がする。最初の一時間は何だかいい加減にやつてしまつた。しかし別段困つた質問も掛けられずに済んだ。控所へ帰つて来たら、山嵐がどう

だいと聞いた。うんと単簡に返事をしたら山嵐は安心したらしかつた。

二時間目に白墨を持つて控所を出た時には何だか敵地へ乗り込むような気がした。教場へ出ると今度の組は前より大きな奴ばかりである。おれは江戸っ子で華奢に小作りに出来ているから、どうも高い所へ上がつても押しが利かない。喧嘩なら相撲取とでもやつてみせるが、こんな大僧を四十人も前へ並べて、ただ一枚の舌をたたいて恐縮させる手際はない。しかしこんな田舎者に弱身を見せるとは癖になるとと思つたから、なるべく大きな声をして、少々巻き舌で講釈してやつた。最初のうちは、生徒も烟に捲かれてぼんやりしていたから、それ見るとますます得意になつて、べらんめい調を用いてたら、一番前の列の真中に居た、一番強そうな奴が、いきなり起立して先生と云う。そり来たと思ひながら、何だと聞いたら「あまり早くて分からんけれ、もちつと、ゆるゆる遣つて、おくれんかな、もし」と云つた。おくれんかな、もしは生温い言葉だ。早過ぎるなら、ゆつくり云つてやるが、おれは江戸っ子だから君等の言葉は使えない、分らなければ、分るまで待つてやつた。この調子で一時間目は思つたより、うまく行つた。ただ帰りがけに生徒の一人がちよつとこの問題を解釈をしておくれんかな、もし、と出来そうもない幾何の問題を持つて逼つたには冷汗を流した。仕方がないから何だか分らない、この次教えてやると急いで引き揚げたら、生徒がわあと囁した。その中に出来ん出来んと云う声が見える。箇棒め、先生だつて、出来ないのは当たり前だ。出来ないと云うのに不思議があるもんか。そんなものが出来るくらいなら四十円でこんな田舎へくるもんかと控所へ帰つて來た。今度はどうだまた山嵐が聞いた。うんと云つたが、うんだけでは氣が済まなかつたから、この学校の生徒は分らずやだなと云つてやつた。山嵐は妙な顔をしていた。

三時間目も、四時間目も昼過ぎの一時間も大同小異であつた。最初の日に出た級は、いづれも少々ずつ失敗した。教師ははたで見るほど樂じやないと思つた。授業はひと通り済んだが、まだ帰れない、三時までぼつ然として待つてなくてはならん。三時になると、受持級の生徒が自分の教室を掃除して報知にくるから検分をするんだそうだ。それから、出席簿を一応調べてようやくお暇が出る。いくら月給で買われた身体だつて、あいた時間まで学校へ縛りつけて机と睨めつくるをさせるなんて法があるものか。しかしほかの連中はみんな大人しくご規則通りやつてるから新参のおればかり、だだを捏ねるのもよろしくないと思って我慢していた。帰りがけに、君何でもかんでも三時過まで学校にいさせるのは愚だぜと山嵐に訴えたら、山嵐はそうさアハハハと笑つたが、あとから眞面目になつて、君あまり学校の不平を云うと、いかんぜ。云うなら僕だけに話せ、随分妙な人も居るからなど忠告がま

しい事を云つた。四つ角で分れたから詳しい事は聞くひまがなかつた。

それからうちへ帰つてくると、宿の亭主がお茶を入れましようと云つてやつて来る。お茶を入れると云うからご馳走をするのかと思うと、おれの茶を遠慮なく入れて自分が飲むのだ。この様子では留守中も勝手にお茶を入れましようを一人で履行しているかも知れない。亭主が云うには手前は書画骨董がすきで、とうとうこんな商賈を内々で始めるようになりました。あなたもお見受け申すところ大分ご風流でいらつしやるらしい。ちと道楽にお始めなすってはいかがですと、飛んでもない勧誘をやる。二年前ある人の使に帝国ホテルへ行つた時は鋸前直しと間違えられた事がある。ケットを被つて、鎌倉の大仏を見物した時は車屋から親方と云われた。その外今日まで見損われた事は随分あるが、まだおれをつらまえて大分ご風流でいらつしやると云つたものはない。大抵はなりや様子でも分る。風流人なんていうものは、画を見ても、頭巾を被るか短冊を持つてるものだ。このおれを風流人だなどと眞面目に云うのはただの曲者じやない。おれはそんな呑気な隠居のやるような事は嫌いだと云つたら、亭主はへへへと笑いながら、いえ始めから好きなものは、どなたもございませんが、いつたんこの道にはいるとなかなか出られませんと一人で茶を注いで妙な手付をして飲んでいる。実はゆうべ茶を買つてくれと頼んでおいたのだが、こんな苦い濃い茶はいやだ。一杯飲むと胃に答えるような気がする。今度からもつと苦くないのを買つてくれと云つたら、かしこまりましたとまた一杯しぶって飲んだ。人の茶だと思つて無暗に飲む奴だ。主人が引き下がつてから、明日の下読みをしてすぐ寝てしまつた。

それから毎日毎日学校へ出でては規則通り働く、毎日毎日帰つて来ると主人がお茶を入れましようと出てくる。一週間ばかりしたら学校の様子もひと通りは飲み込めたし、宿の夫婦の人物も大概は分つた。ほかの教師に聞いてみると辞令を受けて一週間から一ヶ月ぐらいの間は自分の評判がいいだろうか、悪いだろうか非常に気に掛かるそうであるが、おれは一向そんな感じはなかつた。教場で折々しくじるとその時だけはやな心持ちだが三十分ばかり立つと奇麗に消えてしまう。おれは何事によらず長く心配しようと思つても心配が出来ない男だ。教場のしくじりが生徒にどんな影響を与えて、その影響が校長や教頭にどんな反応を呈するかまるで無頓着であつた。おれは前に云う通りあまり度胸の据つた男ではないのだが、思い切りはすこぶるいい人間である。この学校がいけなければすぐどつかへ行く覚悟でいたから、狸も赤シャツも、ちつとも恐しくはなかつた。まして教場の小僧共なんかには愛嬌もお世辞も使う氣になれなかつた。学校はそれでいいのだが下宿の方はそうはいかなかつた。亭主が茶を飲みに来るだけなら我慢もするが、いろいろな者を持つてくる。始めに持つて来たのは何でも印材で、十ばかり並べておいて、みんなで三円なら安い

物だお買いなさいと云う。田舎巡りのヘボ絵師じやあるまいし、そんなものは入らないと云つたら、今度は華山とか何とか云う男の花鳥の掛物をもつて來た。自分で床の間へかけて、いい出来じやありませんかと云うから、そうかなと好加減に挨拶をすると、華山には二人ある、一人は何とか華山で、一人は何とか華山ですが、この幅はその何とか華山の方だと、くだらない講釈をしたあとで、どうです、あなたなら十五円にしておきます。お買いなさいと催促をする。金がないと断わると、金なんか、いつでもようございますとなかなか頑固だ。金があつても買わないんだと、その時は追つ払つちまつた。その後には鬼瓦ぐらいの大硯を担ぎ込んだ。これは端渓です、端渓ですと一遍も三遍も端渓がるから、面白半分に端渓た何だいと聞いたたら、すぐ講釈を始め出した。端渓には上層中層下層とあつて、今時のものはみんな上層ですが、これはたしかに中層です、この眼をご覧なさい。眼が三つあるのは珍らしい。澆墨の具合も至極よろしい、試してご覧なさいと、おれの前へ大きな硯を突きつける。いくらだと聞くと、持主が支那から持つて歸つて來て是非売りたいと云いますから、お安くして三十円にしておきましょうと云う。この男は馬鹿に相違ない。学校の方はどうかこうか無事に勤まりそうだが、こう骨董賣に逢つてはとても長く続きそうにない。

そのうち学校もいやになつた。ある日の晩大町と云う所を散歩していたら郵便局の隣りに蕎麦とかいて、下に東京と注を加えた看板があつた。おれは蕎麦が大好きである。東京に居つた時でも蕎麦屋の前を通つて薬味の香いをかぐと、どうしても暖簾がくぐりたくなつた。今日までは数学と骨董で蕎麦を忘れていたが、こうして看板を見ると素通りが出来なくなる。ついでだから一杯食つて行こうと思つて上がり込んだ。見ると看板ほどでもない。東京と断わる以上はもう少し奇麗にしそうなものだが、東京を知らないのか、金がないのか、滅法きたない。畳は色が変つてお負けに砂でざらざらしている。壁は煤で真黒だ。天井はランプの油烟で燻ぼつてるのみか、低くつて、思わず首を縮めるくらいだ。ただ麗々と蕎麦の名前をかいて張り付けたねだん付けだけは全く新しい。何でも古いうちを買って一二日前から開業したに違ひなかろう。ねだん付の第一号に天麩羅とある。おい天麩羅を持つてこいと大きな声を出した。するどこの時まで隅の方に三人かたまつて、何かつるつる、ちゅうちゅう食つてた連中が、ひとしくおれの方を見た。部屋が暗いので、ちょっと気がつかなかつたが顔を合せると、みんな学校の生徒である。先方で挨拶をしたから、おれも挨拶をした。その晩は久し振に蕎麦を食つたので、旨かつたから天麩羅を四杯平げた。

翌日何の気もなく教場へはいると、黒板一杯ぐらいな大きな字で、天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑つた。おれは馬鹿馬鹿しいから、天麩羅を食つちや可笑しいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と云つた。

四杯食おうが五杯食おうがおれの錢でおれが食うのに文句があるもんかと、さつさと講義を済まして控所へ帰つて來た。十分立て次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。但し笑うべからず。と黒板に書いてある。さつきは別に腹も立たなかつたが今度は癪に障つた。冗談も度を過ぎせばいたずらだ。焼餅の黒焦のようなもので誰も貰め手はない。田舎者はこの呼吸が分からぬからどこまで押して行つても構わないと云う了見だらう。一時間あるくと見物する町もないような狭い都に住んで、外に何にも芸がないから、天麩羅事件を日露戦争のように触れちらかすんだろう。憐れな奴等だ。小供の時から、こんなに教育されるから、いやにひねっこびた、植木鉢の楓みたような小人が出来るんだ。無邪氣ならいっしょに笑つてもいいが、こりやなんだ。小供の癖に乙に毒気を持つてる。おれはだまつて、天麩羅を消して、こんないたずらが面白いか、卑怯な冗談だ。君等は卑怯と云う意味を知つてゐるか、と云つたら、自分がした事を笑われて怒るのが卑怯じやろうがな、もしと答えた奴がある。やな奴だ。わざわざ東京から、こんな奴を教えに来たのかと思つたら情なくなつた。余計な減らず口を利用かないで勉強しようと云つて、授業を始めてしまつた。それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末に終えない。あんまり腹が立つたから、そんな生意気な奴は教えないと云つてすたすた帰つて来てやつた。生徒は休みになつて喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。

天麩羅蕎麦もうちへ帰つて、一晩寝たらそんなに肝癩に障らなくなつた。学校へ出てみると、生徒も出でている。何だか訳が分らない。それから三日ばかりは無事であつたが、四日目の晩に住田と云う所へ行つて団子を食つた。この住田と云う所は温泉のある町で城下から汽車だと十分ばかり、歩いて三十分で行かれる、料理屋も温泉宿も、公園もある上に遊廓がある。おれのはいつた団子屋は遊廓の入口にあつて、大変うまいという評判だから、温泉に行つた帰りがけにちよつと食つてみた。今度は生徒にも逢わなかつたから、誰も知るまいと思って、翌日学校へ行つて、一時間目の教場へはいると団子二皿七錢と書いてある。實際おれは二皿食つて七錢払つた。どうも厄介な奴等だ。二時間目にもきつと何かあると思うと遊廓の団子旨い旨いと書いてある。あきれ返つた奴等だ。団子がそれで済んだと思つたら今度は赤手拭と云うのが評判になつた。何の事だと思つたら、つまらない来歴だ。おれはここへ来てから、毎日住田の温泉へ行く事に極めている。ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉だけは立派なものだ。せつかく來た者だから毎日はいつてやろうという氣で、晩飯前に運動かたがた出掛る。ところが行くときは必ず西洋手拭の大きな奴をぶら下げて行く。この手拭が湯に染つた上へ、赤い縞が流れ出したのでちよつと見ると紅色に見える。おれはこの手拭を

行きも帰りも、汽車に乗つてもあるいても、常にぶら下げている。それで生徒がおれの事を赤手拭赤手拭と云うんだそうだ。どうも狭い土地に住んでるどうるさいものだ。まだある。温泉は三階の新築で上等は浴衣をかして、流しをつけて八銭で済む。その上に女が天目へ茶を載せて出す。おれはいつでも上等へはいった。すると四十円の月給で毎日上等へはいるのは贅沢だと云い出した。余計なお世話だ。まだある。湯壺は花崗石を畳み上げて、十五畳敷ぐらいの広さに仕切つてある。大抵は十三四人漬つてたまには誰も居ない事がある。深さは立つて乳の辺まであるから、運動のために、湯の中を泳ぐのはなかなか愉快だ。おれは人の居ないのを見済しては十五畳の湯壺を泳ぎ巡つて喜んでいた。ところがある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかなとざくろ口を覗いてみると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。湯の中で泳ぐものは、あまりあるまいから、この貼札はおれのために特別に新調したのかも知れない。おれはそれから泳ぐのは断念した。泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚ろいた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵しているようと思われた。くさくさした。生徒が何を云つたって、やろうと思つた事をやめるようなおれではないが、何でこんな狭苦しい鼻の先がつかえるような所へ来たのかと思うと情なくなつた。それでうちへ帰ると相変らず骨董責である。

四

学校には宿直があつて、職員が代る代るこれをつとめる。但し狸と赤シャツは例外である。何でこの両人が当然の義務を免かれのかと聞いてみたら、奏任待遇だからと云う。面白くもない。月給はたくさんどる、時間は少ない、それで宿直を逃がれるなんて不公平があるものか。勝手な規則をこしらえて、それが当たり前だというような顔をしている。よくまああんなにずうずうしく出来るものだ。これについては大分不平であるが、山嵐の説によると、いくら一人で不平を並べたつて通るものじやないそうだ。一人だって二人だって正しい事なら通りそうなものだ。山嵐は *might is right* という英語を引いて説論を加えたが、何だか要領を得ないから、聞き返してみたら強者の権利と云う意味だそうだ。強者の権利ぐらいなら昔から知つてはいる。今さら山嵐から講釈をきかなくつてもいい。強者の権利と宿直とは別問題だ。狸や赤シャツが強者だなんて、誰が承知するものか。議論は議論としてこの宿直がいよいよおれの番に廻つて來た。一体疳性だから夜具蒲団などは自分のものへ楽に寝ないと寝たような心持ちがしない。小

供の時から、友達のうちへ泊つた事はほとんどないくらいだ。友達のうちでさえ厭なら学校の宿直はなおさら厭だ。厭だけれども、これが四十円のうちへ籠つてゐるなら仕方がない。我慢して勤めてやろう。

教師も生徒も帰つてしまつたあとで、一人ぽかんとしているのは随分間が抜けたものだ。宿直部屋は教場の裏手にある寄宿舎の西はずれの一室だ。ちょっとはいつてみたが、西日をまともに受けて、苦しくって居たまれない。田舎だけあつて秋がきてても、気長に暑いもんだ。生徒の賄を取りよせて晩飯を済ましたが、まずいには恐れ入つた。よくあんなものを食つて、あれだけに暴れられたもんだ。それで晩飯を急いで四時半に片付けてしまふんだから豪傑に違ひない。飯は食つたが、まだ日が暮れないから寝る訳に行かない。ちょっと温泉に行きたくなつた。宿直をして、外へ出るのはいい事だか、悪い事だかしらないが、こうつくねんとして重禁錮同様な憂目に逢うのは我慢の出来るもんじやない。始めて学校へ来た時当直の人はと聞いたら、ちょっと用達に出たと小使が答えたのを妙だと思つたが、自分に番が廻つてみると想い当る。出る方が正しいのだ。おれは小使にちょっと出てくると云つたら、何かご用ですかと聞くから、用ぢやない、温泉へはいるんだと答えて、さつさと出掛けた。赤手拭は宿へ忘れて來たのが残念だが今日は先方で借りるとしよう。

それからかなりゆるりと、出たりはいつたりして、ようやく日暮方になつたから、汽車へ乗つて古町の停車場まで来て下りた。学校まではこれから四丁だ。訳はないとあるき出すと、向うから狸が來た。狸はこれからこの汽車で温泉へ行こうと云う計画なんだろう。すたすた急ぎ足にやつてきたが、擦れ違つた時おれの顔を見たから、ちょっと挨拶をした。すると狸はあなたは今日は宿直ではなかつたですかねえと真面目くさつて聞いた。なかつたですかねえもないもんだ。二時間前おれに向つて今夜は始めての宿直ですね。ご苦労さま。と礼を云つたじやないか。校長なんかになるといやに曲りくねつた言葉を使うもんだ。おれは腹が立つたから、ええ宿直です。宿直ですから、これから帰つて泊る事はたしかに泊りますと云い捨てて済ましてあるき出した。豊町の四つ角までくると今度は山嵐に出つ喰わした。どうも狭い所だ。出てあるきさえすれば必ず誰かに逢う。「おい君は宿直じやないか」と聞くから「うん、宿直だ」と答えたら、「宿直が無暗に出てあるくなんて、不都合じやないか」と云つた。「ちつとも不都合なもんか、出であるかない方が不都合だ」と威張つてみせた。「君のずばらにも困るな、校長か教頭に出逢うと面倒だぜ」と山嵐に似合わない事を云うから「校長にはたつた今逢つた。暑い時には散歩でもしないと宿直も骨でしようと校長が、おれの散歩をほめたよ」と云つて、面倒臭いから、さつさと学校へ帰つて來た。

それから日はすぐくれる。くれてから一時間ばかりは小使を宿直部屋へ呼んで話をしたが、それも飽きたから、寝られないまでも床へはいろいろとつて、寝巻に着換えて、蚊帳を捲くつて、赤い毛布を跳ねのけて、とんと尻持を突いて、仰向けになつた。おれが寝るときとにとんと尻持をつくのは小供の時からの癖だ。わるい癖だと云つて小川町の下宿に居た時分、二階下に居た法律学校の書生が苦情を持ち込んだ事がある。法律の書生なんてものは弱い癖に、やに口が達者なもので、愚な事を長たらしく述べ立てるから、寝る時にどんどん音がするのはおれの尻がわるいのじやない。下宿の建築が粗末なんだ。掛け合はうなら下宿へ掛け合えと凹ましてやつた。この宿直部屋は二階じやないから、いくら、どしんと倒れても構わない。なるべく勢よく倒れないと寝たような心持ちがしない。ああ愉快だと足をうんと延ばすと、何だか両足へ飛び付いた。ざらざらして蚤のようでもないからこいつあと驚ろいて、足を二三度毛布の中で振つてみた。するとざらざらと当つたものが、急に殖え出して脛が五六力所、股が二三力所、尻の下でぐちやりと踏み潰したのが一つ、臍の所まで飛び上がつたのが一つ——いよいよ驚ろいた。早速起き上つて、毛布をぱつと後ろへ抛ると、蒲団の中から、バッタが五六十飛び出した。正体の知れない時は多少氣味が悪るかつたが、バッタと相場が極まつてみたら急に腹が立つた。バッタの癖に人を驚ろかしやがつて、どうするか見ると、いきなり括り枕を取つて、二三度擲きつけたが、相手が小さ過ぎるから勢よく抛げつける割に利目がない。仕方がないから、また布団の上へ坐つて、煤掃の時に塵を丸めて畳を叩くように、そこら近辺を無暗にたたいた。バッタが驚ろいた上に、枕の勢で飛び上がるものだから、おれの肩だの、頭だの鼻の先だのへくつ付いたり、ぶつかつたりする。顔へ付いた奴は枕で叩く訳に行かないから、手で攫んで、一生懸命に擲きつける。忌々しい事に、いくら力を出しても、ぶつかる先が蚊帳だから、ふわりと動くだけで少しも手答がない。バッタは擲きつけられたまま蚊帳へつらまつてはいる。死にもどうもしない。ようやくの事に三十分ばかりでバッタは退治た。箒を持つて来てバッタの死骸を掃き出した。小使が来て何ですかと云うから、何ですかもあるもんか、バッタを床の中に銅つとく奴がどこの国にある。間抜め。と叱つたら、私は存じませんと弁解をした。存じませんで済むかと箒を椽側へ抛り出したら、小使は恐る恐る箒を担いで帰つて行つた。

おれは早速寄宿生を二人ばかり総代に呼び出した。すると六人出て來た。六人だろうが十人だろうが構うものか。寝巻のまま腕まくりをして談判を始めた。

「なんでバッタなんか、おれの床の中へ入れた」

言葉を使うんだろう。

「バツタを知らないのか、知らなけりや見せてやろう」と云つたが、生憎掃き出してしまつて一匹も居ない。また小使を呼んで、「さつきのバツタを持つてこい」と云つたら、「もう掃溜へ棄ててしましましたが、拾つて参りましようか」と聞いた。「うんすぐ拾つて来い」と云うと小使は急いで馳け出したが、やがて半紙の上へ十四ばかり載せて来て「どうもお氣の毒ですが、生憎夜でこれだけしか見当りません。あしたになりましたらもつと拾つて参ります」と云う。小使まで馬鹿だ。おれはバツタの一つを生徒に見せて「バツタたこれだ、大きなずう体をして、バツタを知らないた、何の事だ」と云うと、一番左の方に居た顔の丸い奴が「そりや、イナゴぞな、もし」と生意気におれを遣り込めた。「籠棒め、イナゴもバツタも同じもんだ。第一先生を捕まえてなもした何だ。菜飯は田楽の時より外に食うもんじやない」とあべこべに遣り込めてやつたら「なもしと菜飯とは違うぞな、もし」と云つた。いつまで行つてもなもしを使う奴だ。

「イナゴでもバツタでも、何でおれの床の中へ入れたんだ。おれがいつ、バツタを入れてくれと頼んだ」

「誰も入れやせんがな」

「入れないものが、どうして床の中に居るんだ」

「イナゴは温い所が好きじゃけれ、大方一人でおはいりたのじやある」

「馬鹿あ云え。バツタが一人でおはいりになるなんて——バツタにおはいりになられてたまるもんか。——さあなぜこんないたずらをしたか、云え」

「云えてて、入れんものを説明しようがないがな」

けちな奴等だ。自分で自分のした事が云えないくらいなら、てんでしないがいい。証拠さえ挙がらなければ、しらを切るつもりで凶太く構えていやがる。おれだって中学に居た時分は少しほはいたずらもしたもんだ。しかしだがしたと聞かれた時に、尻込みをするような卑怯な事はただの一度もなかつた。したものはしたので、しないものはしないに極つてる。おれなんぞは、いくらくいたずらをしたつて潔白なものだ。嘘を吐いて罰を逃げるくらいなら、始めからいたずらなんかやるものか。いたずらと罰はつきもんだ。罰があるからいたずらも心持ちよく出来る。いたずらだけで罰はご免蒙るなんて下劣な根性がどこの国に流行ると思つてるんだ。金は借りるが、返す事はご免だと云う連中はみんな、こんな奴等が卒業してやる仕事に相違ない。全体中学校へ何しには

いつてるんだ。学校へはいつて、嘘を吐いて、胡魔化して、陰でこせこせ生意氣な悪いたずらをして、そうして大きな面で卒業すれば教育を受けたもんだと瘤違ひをしていやがる。話せない雑兵だ。

おれはこんな腐った了見の奴等と談判するのは胸糞が悪いから、「そんなに云われなきや、聞かなくつていい。中学校へはいつて、上品も下品も区別が出来ないのは氣の毒なものだ」と云つて六人を逐つ放してやつた。おれは言葉や様子こそあまり上品じやないが、心はこいつらよりも遙かに上品なつもりだ。六人は悠々と引き揚げた。上部だけは教師のおれよりよっぽどえらく見える。実は落ち付いているだけなお悪い。おれには到底これほどの度胸はない。

それからまた床へはいつて横になつたら、さつきの騒動で蚊帳の中はぶんぶん唸つてゐる。手燭をつけて一匹ずつ焼くなんて面倒な事は出来ないから、釣手をはずして、長く畳んでおいて部屋の中で横堅十文字に振つたら、環が飛んで手の甲をいやというほど撲つた。三度目に床へはいつた時は少々落ち付いたがなかなか寝られない。時計を見ると十時半だ。考えてみると厄介な所へ来たもんだ。一体中学の先生なんて、どこへ行つても、こんなものを相手にするなら氣の毒なものだ。よく先生が品切れにならない。よっぽど辛防強い朴念仁がなるんだろう。おれには到底やり切れない。それを思うと清なんてのは見上げたものだ。教育もいい身分もない婆さんだが、人間としてはすこぶる尊とい。今まであんなに世話をになつて別段難有いとも思わなかつたが、こうして、一人で遠国へ来てみると、始めてあの親切がわかる。越後の笠飴が食いたければ、わざわざ越後まで買いに行つて食わしてやって、食わせるだけの価値は充分ある。清はおれの事を欲がなくつて、真直な気性だと云つて、ほめるが、ほめられるおれよりも、ほめる本人の方が立派な人間だ。何だか清に逢いたくなつた。

清の事を考えながら、のつそつしていると、突然おれの頭の上で、数で云つたら三四十人もあるうか、二階が落つこちるほどどん、どん、どんと拍子を取つて床板を踏みならす音がした。すると足音に比例した大きな鬨の声が起つた。おれは何事が持ち上がつたのかと驚いて飛び起きた。飛び起くる途端に、ははあさつきの意趣返しに生徒があばれるのだなど気がついた。手前のわるい事は悪るかつたと言つてしまわぬいうちは罪は消えないもんだ。わるい事は、手前達に覚があるだろう。本来なら寝てから後悔してあしたの朝でもあやまりに来るのが本筋だ。たとい、あやまらないまでも恐れ入つて、静肅に寝ていいべきだ。それを何だこの騒ぎは。寄宿舎を建てて豚でも飼つておきあしまいし。気狂いじみた真似も大抵にするがいい。どうするか見ると、寝巻のまま宿直部屋を飛び出して、楷子段を三股半に二階まで躍り上がつた。すると不思議な事に、今まで頭の上で、たしかにどたばた暴れてい

たのが、急に静まり返つて、人声どころか足音もしなくなつた。これは妙だ。ランプはすでに消してあるから、暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人気のあるとないとは様子でも知れる。長く東から西へ貫いた廊下には鼠一匹も隠れていない。廊下のはずれから月がさして、遙か向うが際どく明るい。どうも変だ、おれは小供の時から、よく夢を見る癖があつて、夢中に跳ね起きて、わからぬ寝言を云つて、人に笑われた事がよくある。十六七の時ダイヤモンドを拾つた夢を見た晩などは、むくりと立ち上がりつて、そばに居た兄に、今のダイヤモンドはどうしたと、非常な勢で尋ねたくらいだ。その時は三日ばかりうち中の笑い草になつて大いに弱つた。ことによると今のも夢かも知れない。しかしながらあはれたに違ひないがと、廊下の真中で考え込んでいると、月のさしている向うのはずれで、一二三わあと、三四十人の声がかたまつて響いたかと思う間もなく、前のように拍子を取つて、一同が床板を踏み鳴らした。それ見る夢じやないやつぱり事実だ。静かにしろ、夜なかだぞ、とこつちも負けんくらいな声を出して、廊下を向うへ馳けだした。おれの通る路は暗い、ただはざれに見える月あかりが目標だ。おれが馳け出して二間も来たかと思うと、廊下の真中で、堅い大きなものに向脛をぶつけて、あ痛いが頭へひびく間に、身体はすとんと前へ抛り出された。こん畜生と起き上がつてみたが、馳けられない。気はせくが、足だけは云う事を利かない。じれつたいから、一本足で飛んで来たら、もう足音も人声も静まり返つて、森としている。いくら人間が卑怯だつて、こんなに卑怯に出来るものじやない。まるで豚だ。こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、心を極めて寝室の一つを開けて中を検査しようと思つたが開かない。錠をかけてあるのか、机か何か積んで立て懸けてあるのか、押しても、押しても決して開かない。今度は向う合せの北側の室を試みた。開かない事はやつぱり同然である。おれが戸を開けて中に居る奴を引っ捕らまえてやろうと、焦慮てるが、また東のはずれで鬨の声と足拍子が始まつた。この野郎申し合せて、東西相応じておれを馬鹿にする氣だな、とは思つたがさてどうしていいか分らない。正直に白状してしまうが、おれは勇気のある割合に智慧が足りない。こんな時にはどうしていいかさつぱりわからない。わからぬけれども、決して負けるつもりはない。このままに済ましてはおれの顔にかかる。江戸っ子は意氣地がないと云われるのは残念だ。宿直をして鼻垂れ小僧にからかわられて、手のつけようがなくつて、仕方がないから泣き寝入りにしたと思われちゃ一生の名折れだ。これでも元は旗本だ。旗本の元は清和源氏で、多田の満仲の後裔だ。こんな土百姓とは生まれからして違うんだ。ただ智慧のないところが惜しいだけだ。どうしていいか分らないのが困るだけだ。困つたつて負けるものか。正直だから、どうしていいか分らないんだ。世の中に正直が勝たないで、外に勝つものがあるか、考えてみろ。今夜中に勝てなければ、

あした勝つ。あした勝てなければ、あさつて勝つ。あさつて勝てなければ、下宿から弁当を取り寄せて勝つまでここに居る。おれはこう決心をしたから、廊下の真中へあぐらをかいて夜のあけるのを待っていた。蚊がぶんぶん来たけれども何ともなかつた。さつき、ぶつけた向脛を撫でてみると、何だかぬらぬらする。血が出るんだろう。血なんか出たければ勝手に出るがいい。そのうち最前からの疲れが出て、ついうとうと寝てしまつた。何だか騒がしいので、眼が覚めた時はえつ糞しまつたと飛び上がつた。おれの坐つてた右側にある戸が半分あいて、生徒が二人、おれの前に立つている。おれは正気に返つて、はつと思う途端に、おれの鼻の先にある生徒の足を引つ攫んで、力任せにぐいと引いたら、そいつは、どたりと仰向に倒れた。ざまを見る。残る一人がちよつと狼狽したところを、飛びかかるて、肩を抑えて二三度こづき廻したら、あつけに取られて、眼をぱちぱちさせた。さあおれの部屋まで来いと引つ立てるど、弱虫だと見えて、一も二もなく尾いて来た。夜はどうにあけている。

おれが宿直部屋へ連れてきた奴を詰問し始めるど、豚は、打つても擲いても豚だから、ただ知らんがなで、どこまでも通す了見と見えて、けつして白状しない。そのうち一人来る、二人来る、だんだん二階から宿直部屋へ集まつてくる。見るとみんな眠そうに瞼をはらしている。けちな奴等だ。一晩ぐらい寝ないで、そんな面をして男と云われるか。面でも洗つて議論に来いと云つてやつたが、誰も面を洗いに行かない。

おれは五十人あまりを相手に約一時間ばかり押問答をしていると、ひょつくり狸がやつて來た。あとから聞いたら、小使が学校に騒動がありますつて、わざわざ知らせに行つたのだそうだ。これしきの事に、校長を呼ぶなんて意氣地がなさ過ぎる。それだから中学校の小使なんぞをしてるんだ。

校長はひと通りおれの説明を聞いた。生徒の言草もちよつと聞いた。追つて処分するまでは、今まで通り学校へ出ろ。早く顔を洗つて、朝飯を食わないと時間に間に合わないとから、早くしろと云つて寄宿生をみんな放免した。手温るい事だ。おれなら即席に寄宿生をことごとく退校してしまう。こんな悠長な事をするから生徒が宿直員を馬鹿にするんだ。その上おれに向つて、あなたもさぞ心配でお疲れでしょう、今日はご授業に及ばんと云うから、おれはこう答えた。「いえ、ちつとも心配じやありません。こんな事が毎晩あつても、命のある間は心配にやなりません。授業はります、一晩ぐらい寝なくつて、授業が出来ないくらいなら、頂戴した月給を学校の方へ割戻します」校長は何と思つたものか、しばらくおれの顔を見つめていたが、しかし顔が大分はれていますよと注意した。なるほど何だか少々重たい気がする。その上べた一面痒い。蚊がよつぱと刺したに相違ない。おれは顔中ぼり

ぱり搔きながら、顔はいくら膨れたつて、口はたしかにきけますから、授業には差し支えませんと答えた。校長は笑いながら、大分元気ですねと賞めた。実を云うと賞めたんじやあるまい、ひやかしたんだろう。

五

君釣りに行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは氣味の悪るいように優しい声を出す男である。まるで男だか女だか分りやしない。男なら男らしい声を出すもんだ。ことに大学卒業生じやないか。物理学校でさえおれくらいな声が出るのに、文学士がこれじや見つともない。

おれはそうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をした事がありますかと失敬な事を聞く。あんまりないが、子供の時、小梅の釣堀で鮎を三匹釣った事がある。それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちやりと落としてしまつたがこれは今考へても惜しいと云つたら、赤シャツは頬を前の方へ突き出してホホホホと笑つた。何もそう気取つて笑わなくつても、よさそうな者だ。「それじや、まだ釣りの味は分らんですな。お望みならちと伝授しましよう」とすこぶる得意である。だれがご伝授をうけるものか。一体釣や猟をする連中はみんな不人情な人間ばかりだ。不人情でなくつて、殺生をして喜ぶ訳がない。魚だつて、鳥だつて殺されるより生きてる方が樂に極まつて。釣や猟をしなくつちや活計がたたないなら格別だが、何不足なく暮している上に、生き物を殺さなくつちや寝られないなんて贅沢な話だ。こう思つたが向うは文学士だけに口が達者だから、議論じや叶わないと思つて、だまつてた。すると先生このおれを降参させたと疳違ひして、早速伝授しましょう。おひまなら、今日どうです、いつしょに行つちや。吉川君と二人ぎりじや、淋しいから、来たまえとしきりに勧める。吉川君というのは画学の教師で例の野だいこの事だ。この野だは、どういう了見だか、赤シャツのうちへ朝夕出入して、どこへでも隨行して行く。まるで同輩じやない。主従みたようだ。赤シャツの行く所なら、野だは必ず行くに極つてゐるんだから、今さら驚ろきもしないが、二人で行けば済むところを、なんで無愛想のおれへ口を掛けたんだろう。大方高慢ちきな釣道楽で、自分の釣るところをおれに見せびらかすつもりかなんかで誘つたに違ひない。そんな事で見せびらかされるおれじやない。鮒の二匹や三匹釣つたつて、びくともするもんか。おれだつて人間だ、いくら下手だつて糸さえ卸しや、何かかかるだろう、ここでおれが行かないと、赤

シャツの事だから、下手だから行かないんだ、嫌いだから行かないんじやないと邪推するに相違ない。おれはこう考えたから、行きましょと答えた。それから、学校をしまって、一応うちへ帰つて、支度を整えて、停車場で赤シャツと野だを待ち合せて浜へ行つた。船頭は一人で、船は細長い東京辺では見た事もない恰好である。さつきから船中見渡すが釣竿が一本も見えない。釣竿なしで釣が出来るものか、どうする了見だらうと、野だに聞くと、沖釣には竿は用いません、糸だけでげすと顎を撫でて黒人じみた事を云つた。こう遣り込められるくらいならだまつていればよかつた。

船頭はゆつくりゆつくり漕いでいるが熟練は恐しいもので、見返えると、浜が小さく見えるくらいもう出でている。高柏寺の五重の塔が森の上へ抜け出して針のように尖がつてゐる。向側を見ると青嶋が浮いてゐる。これは人の住まない島だそうだ。よく見ると石と松ばかりだ。なるほど石と松ばかりじや住めっこない。赤シャツは、しきりに眺望していい景色だと云つてゐる。野だは絶景でげすと云つてゐる。絶景だか何だか知らないが、いい心持ちには相違ない。ひろびろとした海の上で、潮風に吹かれるのは薬だと思つた。いやに腹が減る。「あの松を見たまえ、幹が真直で、上が傘のよう開いてターナーの画にありそうだね」と赤シャツが野だに云うと、野だは「全くターナーですね。どうもあの曲り具合つたらありませんね。ターナーそつくりですよ」と心得顔である。ターナーとは何の事だか知らないが、聞かないでも困らない事だから黙つてゐた。舟は島を右に見てぐるりと廻つた。波は全くない。これで海だとは受け取りにくいくらいほど平だ。赤シャツのお陰ではなはだ愉快だ。出来る事なら、あの島の上へ上がってみたいと思つたから、あの岩のある所へは舟はつけられないんですけど聞いてみた。つけられん事もないですが、釣をするには、あまり岸じゃいけないですと赤シャツが異議を申し立てた。おれは黙つてた。すると野だがどうです教頭、これからあの島をターナー島と名づけようぢやありませんかと余計な発議をした。赤シャツはそいつは面白い、吾々はこれからそう云おうと賛成した。この吾々のうちにおれもはいつてゐるなら迷惑だ。おれには青嶋でたくさんだ。あの岩の上に、どうです、ラフハエルのマドンナを置いちゃ。いい画が出来ますぜと野だが云うと、マドンナの話はよそうじやないかホホホホと赤シャツが気味の悪い笑い方をした。なに誰も居ないから大丈夫ですと、ちよつとおれの方を見たが、わざと顔をそむけてにやにやと笑つた。おれは何だかやな心持ちがした。マドンナだろうが、小旦那だろうが、おれの関係した事でないから、勝手に立たせるがよからうが、人に分らない事を言つて分らないから聞いたつて構やしませんてえような風をする。下品な仕草だ。これで当人は私も江戸つ子でげすなどと云つてゐる。マドンナと云うのは何でも赤シャツの馴染の芸者の渾名か何かに違いないと思つた。なじみの芸者を無人島の松の木の下に立たして眺め

ていれば世話はない。それを野だが油絵にでもかいて展覧会へ出したらよかるう。

ここいらがいいだろと船頭は船をとめて、錨を卸した。幾尋あるかねと赤シャツが聞くと、六尋ぐらいだと云う。六尋ぐらいじゃ鯛はむずかしいなど、赤シャツは糸を海へなげ込んだ。大将鯛を釣る気と見える、豪胆なものだ。野だは、なに教頭のお手際じやかかりますよ。それになぎですからとお世辞を云いながら、これも糸を繰り出して投げ入れる。何だか先に錐のような鉛がぶら下がつてゐるだけだ。浮がない。浮がなくて釣をするのは寒暖計なしで熱度をはかるようなものだ。おれには到底出来ないと見ていると、さあ君もやりたまえ糸はありますかと聞く。糸はあるほどあるが、浮がありませんと云つたら、浮がなくつちや釣が出来ないのは素人ですよ。こうしてね、糸が水底へついた時分に、船縁の所で人指しゆびで呼吸をはかるんです、食うとすぐ手に答える。——そらきた、と先生急に糸をたぐり始めるから、何かかかったと思つたら何にもかからない、餌がなくなつてたばかりだ。いい氣味だ。教頭、残念な事をしましたね、今のはたしかに大ものに違ひなかつたんですが、どうも教頭のお手際でさえ逃げられちゃ、今日は油断ができませんよ。しかし逃げられても何ですね。浮と睨めくらをしている連中よりはましですね。ちょうど歯どめがなくつちや自転車へ乗れないのと同程度ですかねと野だは妙な事ばかり喋舌る。よっぽど撲りつけてやろうかと思つた。おれだつて人間だ、教頭ひとりで借り切つた海じやあるまいし。広い所だ。鯉の一匹ぐらい義理にだつて、かかつてくれるだろうと、どぼんと錐と糸を抛り込んでいい加減に指の先であやつっていた。

しばらくすると、何だかぴくぴくと糸にあたるものがある。おれは考えた。こいつは魚に相違ない。生きてるものでなくつちや、こうぴくつく訳がない。しめた、釣れたとぐいぐい手繰り寄せた。おや釣れましたかね、後世恐るべしだと野だがひやかすうち、糸はもう大概手繰り込んでただ五尺ばかりほどしか、水に浸いておらん。船縁から覗いてみたら、金魚のような縞のある魚が糸にくつついて、右左へ漾いながら、手に応じて浮き上がつてくる。面白い。水際から上げるとき、ぼちやりと跳ねたから、おれの顔は潮水だらけになつた。ようやくつらまえて、針をとろうとするがなかなか取れない。捕まえた手はぬるぬるする。大いに気味がわるい。面倒だから糸を振つて胸の間へ擲きつけたら、すぐ死んでしまつた。赤シャツと野だは驚ろいて見てゐる。おれは海の中で手をざぶざぶと洗つて、鼻の先へあてがつてみた。まだ腥臭い。もう懲り懲りだ。何が釣れたつて魚は握りたくない。魚も握られたくなかろう。そうそう糸を捲いてしまつた。

一番槍はお手柄だがゴルキじや、と野だがまた生意氣を云ふと、ゴルキと云ふと露西亞の文学者みたよな名だねと赤シャツが

洒落た。そうですね、まるで露西亞の文学者ですねと野だはすぐ賛成しやがる。ゴルキが露西亞の文学者で、丸木が芝の写真師で、米のなる木が命の親だらう。一体この赤シャツはわるい癖だ。誰を捕まえても片仮名の唐人の名を並べたがる。人にはそれぞれ専門があつたものだ。おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。云うならフランクリンの自伝だとかプッシング、ツー、ゼ、フロントだとか、おれでも知つてゐる名を使うがいい。赤シャツは時々帝国文学とかいう真赤な雑誌を学校へ持つて来て難有そくに讀んでゐる。山嵐に聞いてみたら、赤シャツの片仮名はみんなあの雑誌から出るんだそうだ。帝国文学も罪な雑誌だ。

それから赤シャツと野だは一生懸命に釣つていたが、約一時間ばかりのうちに二人で十五六上げた。可笑しい事に釣れるのも、釣れるのも、みんなゴルキばかりだ。鯛なんて薬にしたくつもありやしない。今日は露西亞文学の大当たりだと赤シャツが野だに話している。あなたの手腕でゴルキなんですから、私なんぞがゴルキなのは仕方がありません。当り前ですなど野だが答えてゐる。船頭に聞くとこの小魚は骨が多くつて、まずくつて、とても食えないんだそうだ。ただ肥料には出来るそうだ。赤シャツと野だは一生懸命に肥料を釣つているんだ。氣の毒の至りだ。おれは一匹で懲りたから、胴の間へ仰向けになつて、さつきから大空を眺めていた。釣をするよりこの方がよっぽど洒落てる。

すると二人は小声で何か話始めた。おれにはよく聞えない、また聞きたくもない。おれは空を見ながら清の事を考へてゐる。金があつて、清をつれて、こんな奇麗な所へ遊びに来たらさぞ愉快だらう。いくら景色がよくつても野だなどといつしょじやつまらない。清は皺苦茶だらけの婆さんだが、どんな所へ連れて出たつて恥ずかしい心持ちはしない。野だのようなのは、馬車に乗ろうが、船に乗ろうが、凌雲閣へのろうが、到底寄り付けたものじやない。おれが教頭で、赤シャツがおれだつたら、やつぱりおれにへつけお世辞を使つて赤シャツを冷かすに違ひない。江戸っ子は軽薄だと云うがなるほどこんなものが田舎巡りをして、私は江戸っ子でげすと繰り返していら、軽薄は江戸っ子で、江戸っ子は軽薄の事だと田舎者が思ふに極まつてゐる。こんな事を考へていると、何だか一人がくすくす笑い出した。笑い声の間に何か云うが途切れ途切れでどんと要領を得ない。

「え？ どうだか……」「……全くです……知らないんですから……罪ですね」「まさか……」「バッタを……本當ですよ」

おれは外の言葉には耳を傾けなかつたが、バッタと云う野だの語を聽いた時は、思わずきつとなつた。野だは何のためかバッタと云う言葉だけことさら力を入れて、明瞭におれの耳にはいるようにして、そのあとをわざとぼかしてしまつた。おれは動かない

でやはり聞いていた。

「また例の堀田が……」「そうかも知れない……」「天麩羅……ハハハハハ」「……煽動して……」「団子も?」

言葉はかように途切れ途切れであるけれども、バッタだの天麩羅だの、団子だのというところをもつて推し測つてみると、何でもおれのことについて内所話をしているに相違ない。話すならもつと大きな声で話すがいい、また内所話をするくらいなら、おれなんか誘わなければいい。いけ好かない連中だ。バッタだろうが雪踏だろうが、非はおれにある事じやない。校長がひとまずあずけると云つたから、狸の顔にめんじてただ今のところは控えているんだ。野だの癖に入らぬ批評をしやがる。毛筆でもしやぶつて引っ込んでるがいい。おれの事は、遅かれ早かれ、おれ一人で片付けてみせるから、差支えはないが、また例の堀田がとか煽動してとか云う文句が気にかかる。堀田がおれを煽動して騒動を大きくしたと云う意味なのか、あるいは堀田が生徒を煽動しておれをいじめたと云うのか方角がわからない。青空を見ていると、日の光がだんだん弱つて来て、少しばひやりとする風が吹き出した。線香の烟のような雲が、透き徹る底の上を静かに伸して行つたと思つたら、いつしか底の奥に流れ込んで、うすくもやを掛けたようになつた。

もう帰ろうかと赤シャツが思い出したように云うと、ええちょうど時分ですね。今夜はマドンナの君にお逢いですかと野だが云う。赤シャツは馬鹿あ云つちゃいけない、間違いになると、船縁に身を倚たした奴を、少し起き直る。エヘヘヘ大丈夫ですよ。聞いたつて……と野だが振り返つた時、おれは皿のような眼を野だの頭の上へまともに浴びせ掛けでやつた。野だはまぼしそうに引つ繰り返つて、や、こいつは降参だと首を縮めて、頭を搔いた。何という猪口才だろう。

船は静かな海を岸へ漕ぎ戻る。君釣はあまり好きでないと見えますねと赤シャツが聞くから、ええ寝ていて空を見る方がいいですと答えて、吸いかけた巻烟草を海の中へたたき込んだら、ジュと音がして艤の足で搔き分けられた浪の上を揺られながら漾つていつた。「君が来たんで生徒も大いに喜んでいるから、奮発してやつてくれたまえ」と今度は釣にはまるで縁故もない事を云い出した。「あんまり喜んでもいないでしよう」「いえ、お世辞じゃない。全く喜んでいるんです、ね、吉川君」「喜んでるどころじゃない。大騒ぎです」と野だはにやにやと笑つた。こいつの云う事は一々癪に障るから妙だ。「しかし君注意しないと、陥呑ですよ」と赤シャツが云うから「どうせ陥呑です。こうなりや陥呑は覚悟です」と云つてやつた。実際おれは免職になるか、寄宿生をことごとくあやまらせるか、どつちか一つにする了見ていた。「そう云つちや、取りつきどころもないが——実は僕も教頭として君のため

を思うから云うんだが、わるく取っちゃ困る」「教頭は全く君に好意を持つてゐるんですよ。僕も及ばずながら、同じ江戸っ子だから、なるべく長くご在校を願つて、お互に力になろうと思つて、これでも蔭ながら尽力しているんですよ」と野だが人間並の事を云つた。野だのお世話になるくらいなら首を縊つて死んじまわあ。

「それでね、生徒は君の来たのを大変歓迎しているんだが、そこにはいろいろな事情があつてね。君も腹の立つ事もあるだろうが、ここが我慢だと思って、辛防してくれたまえ。決して君のためにならないような事はしないから」

「いろいろの事情だ、どんな事情です」

「それが少し込み入つてゐるんだが、まあだんだん分りますよ。僕が話さないでも自然と分つて来るです、ね吉川君」

「ええなかなか込み入つてますからね。一朝一夕にや到底分りません。しかしだんだん分ります、僕が話さないでも自然と分つて来ます」と野だは赤シャツと同じような事を云う。

「そんな面倒な事情なら聞かなくてもいいんですが、あなたの方から話し出したから伺うんです」

「そりやごもつともだ。こつちで口を切つて、あとをつけないのは無責任ですね。それじゃこれだけの事を云つておきましよう。あなたは失礼ながら、まだ学校を卒業したてで、教師は始めての、経験である。ところが学校というものはなかなか情実のあるもので、そう書生流に淡泊には行かないですからね」

「淡泊に行かなければ、どんな風に行くんです」

「さあ君はそう率直だから、まだ経験に乏しいと云うんですけどね……」

「どうせ経験には乏しいはずです。履歴書にもかいときましたが二十三年四ヶ月ですから」

「さ、そこで思ひぬ辺から乗ぜられる事があるんです」

「正直にしていれば誰が乗じたつて怖くはないです」

「無論怖くはない、怖くはないが、乗ぜられる。現に君の前任者がやられたんだから、気を付けないと云うんです」

「野だが大人しくなったなど気が付いて、ふり向いて見ると、いつしか艤の方で船頭と釣の話をしている。野だが居ないんでよっぽど話しよくなつた。

「僕の前任者が、誰れに乗せられたんです」

「だれと指すと、その人の名譽に關係するから云えない。また判然と証拠のない事だから云うとこっちの落度になる。とにかく、せつかく君が来たもんだから、ここで失敗しちゃ僕等も君を呼んだ甲斐がない。どうか気を付けてくれたまえ」

「氣を付けるつたって、これより氣の付けようはありません。わるい事をしなけりや好いんでしよう」

赤シャツはホホホホと笑った。別段おれは笑われるような事を云つた覚えはない。今日ただ今に至るまでこれでいいと堅く信じている。考えてみると世間の大部分の人はわるくなる事を奨励しているように思う。わるくならなければ社会に成功はしないものと信じているらしい。たまに正直な純粹な人を見ると、坊っちゃんの小僧だと難癖をつけて軽蔑する。それじゃ小学校や中学校で嘘をつくな、正直にしろと倫理の先生が教えない方がいい。いつそ思い切つて学校で嘘をつく法とか、人を信じない術とか、人を乗せる策を教授する方が、世のためにも当人のためにもなるだろう。赤シャツがホホホホと笑ったのは、おれの単純なのを笑つたのだ。単純や真率が笑われる世の中じや仕様がない。清はこんな時に決して笑つた事はない。大いに感心して聞いたもんだ。清の方が赤シャツよりよっぽど上等だ。

「無論悪い事をしなければ好いんですが、自分だけ悪い事をしなくつても、人の悪いのが分らなくつちや、やつぱりひどい目に逢うでしょう。世の中には磊落なように見えて、淡泊なように見えて、親切に下宿の世話なんかしてくれても、めつたに油断の出来ないのがありますから……。大分寒くなつた。もう秋ですね、浜の方は靄でセピヤ色になつた。いい景色だ。おい、吉川君どうだい、あの浜の景色は……」と大きな声を出して野だを呼んだ。なあるほどこりや奇絶ですね。時間があると写生するんだが、惜しいですね、このままにしておくのはと野だは大いにたたく。

港屋の二階に灯が一つついて、汽車の笛がヒューと鳴るとき、おれの乗つていた舟は磯の砂へざぐりと、舳をつき込んで動かなくなつた。お早うお帰りと、かみさんが、浜に立つて赤シャツに挨拶する。おれは船端から、やつと掛声をして磯へ飛び下りた。

六

野だは大嫌いだ。こんな奴は沢庵石をつけて海の底へ沈めちまう方が日本のためだ。赤シャツは声が氣に食わない。あれは持前の声をわざと氣取つてあんな優しいように見せてるんだろう。いくら気取つたつて、あの面じや駄目だ。惚れるものがあつたつて

マドンナぐらいなものだ。しかし教頭だけに野だよりむずかしい事を云う。うちへ帰つて、あいつの申し条を考えてみると一応もつとのようでもある。はつきりとした事は云わないから、見当がつきかねるが、何でも山嵐がよくない奴だから用心しろと云うのらしい。それならそとはつきり断言するがいい、男らしくもない。そうして、そんな悪るい教師なら、早く免職さしたらよからう。教頭なんて文学士の癖に意氣地のないもんだ。蔭口をきくのでさえ、公然と名前が云えないくらいな男だから、弱虫に極まつてる。弱虫は親切なものだから、あの赤シャツも女のような親切ものなんだろう。親切は親切、声は声だから、声が気に入らないつて、親切を無にしちや筋が違う。それにしても世の中は不思議なものだ、虫の好かない奴が親切で、気のあつた友達が悪漢たんて、人を馬鹿にしている。大方田舎だから万事東京のさかに行くんだろう。物騒な所だ。今に火事が起つて、石が豆腐になるかも知れない。しかし、あの山嵐が生徒を煽動するなんて、いたずらをしそうもないがな。一番人望のある教師だと云うから、やろうと思つたら大抵の事は出来るかも知れないが、——第一そんな廻りくどい事をしないでも、じかにおれを捕まえて喧嘩を吹き懸けりや手数が省ける訳だ。おれが邪魔になるなら、実はこれこれだ、邪魔だから辞職してくれと云や、よさそうなもんだ。物は相談づくりでどうでもなる。向うの云い条がもつともなら、明日にでも辞職してやる。ここばかり米が出来る訳もあるまい。どこの果へ行つたって、のたれ死はしないつもりだ。山嵐もよっぽど話せない奴だな。

ここへ来た時第一番に冰水を奢つたのは山嵐だ。そんな裏表のある奴から、冰水でも奢つてもらつちゃ、おれの顔に閑わる。おれはたつた一杯しか飲まなかつたから一銭五厘しか払わしちゃない。しかし一銭だろうが五厘だろうが、詐欺師の恩になつては、死ぬまで心持ちがよくない。あした学校へ行つたら、一銭五厘返しておこう。おれは清から三円借りている。その三円は五年経つた今日まだ返さない。返せないんじやない。返さないんだ。清は今に返すだろうなどと、かりそめにもおれの懷中をあてにしてはいない。おれも今に返そなどと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こっちがこんな心配をすればするほど清の心を疑ぐるようなもので、清の美しい心にけちを付けると同じ事になる。返さないのは清を踏みつけるのじやない、清をおれの片切れと思うからだ。清と山嵐とはもとより比べ物にならないが、たとい冰水だろうが、甘茶だろうが、他人から恵を受けて、だまつてるのは向うをひとかどの人間と見立てて、その人間に對する厚意の所作だ。割前を出せばそれだけの事で済むところを、心のうちに難有いと恩に着るのは銭金で買える返礼じやない。無位無冠でも一人前の独立した人間だ。独立した人間が頭を下げるのは百万両より尊といお礼と思わなければならぬ。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘奮発させて、百万両より尊とい返礼をした氣でいる。山嵐は難有いと思つてしかるべきだ。それに裏へ廻つて卑劣な振舞をするとは怪しからん野郎だ。あした行つて一銭五厘返してしまえば借りも貸しもない。そうしておいて喧嘩をしてやるう。

おれはここまで考えたら、眠くなつたからぐうぐう寝てしまつた。あくる日は思う仔細があるから、例刻より早ヤ目に出校して山嵐を待ち受けた。ところがなかなか出て来ない。うらなりが出て来る。漢学の先生が出て来る。野だが出て来る。しまいには赤シャツまで出て来たが山嵐の机の上は白墨が一本豎に寝てゐるだけで閑静なものだ。おれは、控所へはいるや否や返そつうと思って、うちを出る時から、湯銭のように手の平へ入れて一銭五厘、学校まで握つて來た。おれは膏つ手だから、開けてみると一銭五厘が汗をかいている。汗をかいてる錢を返しちゃ、山嵐が何とか云うだらうと思つたから、机の上へ置いてふうふう吹いてまた握つた。ところへ赤シャツが来て昨日は失敬、迷惑でしたらうと云つたから、迷惑じやありません、お蔭で腹が減りましたと答えた。すると赤シャツは山嵐の机の上へ肱を突いて、あの盤台面をおれの鼻の側面へ持つて來たから、何をするかと思つたら、君昨日返りがけに船の中で話した事は、秘密にしてくれたまえ。まだ誰にも話しやしますまいねと云つた。女のような声を出すだけに心配性な男と見える。話さない事はたしかである。しかしこれから話そと云う心持ちで、すでに一銭五厘手の平に用意しているくらいだから、ここで赤シャツから口留めをされちゃ、ちと困る。赤シャツも赤シャツだ。山嵐と名を指さないにしろ、あれほど推察の出来る謎をかけておきながら、今さらその謎を解いちや迷惑だとは教頭とも思えぬ無責任だ。元来ならおれが山嵐と戦争をはじめて鎬を削つてる真中へ出て堂々とおれの肩を持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着てゐる主意も立つというもんだ。おれは教頭に向つて、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云つたら、赤シャツは大いに狼狽して、君そんな無法な事をしちや困る。僕は堀田君の事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動を起すつもりで來たんじやなかろうと妙に常識をはずれた質問をするから、当り前です、月給をもらつたり、騒動を起したりしちや、学校の方でも困るでしようと云つた。すると赤シャツはそれじや昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなど汗をかいて依頼に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましようと受け合つた。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこまで女らしいんだか奥行がわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄の合わない、論理に欠けた注文をして恬然としている。しかもこのおれを疑ぐつてゐる。

憚りながら男だ。受け合つた事を裏へ廻つて反古にするようなさもしい了見はもつてるもんか。

ところへ両隣りの机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ帰つて行つた。赤シャツは歩るき方から気取つてゐる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴の底をそつと落す。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知つた。泥棒の稽古じやあるまいし、当たり前にするがいい。やがて始業の喇叭がなつた。山嵐はどうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ帰つたら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思つたら遅刻したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金を出したまえと云つた。おれは机の上にあつた一銭五厘を出して、これをやるから取つておけ。先達で通町で飲んだ水水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云つてるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目でいるので、つまらない冗談をするなど錢をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこまでも奢る氣だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に水水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一銭五厘が気になるなら取つてもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云つた。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣をあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合つたんだから動きがとれない。人がこんなに真赤になつてゐるのにふんという理窟があるものか。

「水水の代は受け取るから、下宿は出でくれ」

「一銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手でない、昨日、あすこの亭主が来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたら亭主の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝あすこへ寄つて詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知つてるもんか。そう自分で極めたつて仕様があるか。訳があるなら、訳を話すが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千万な事を云うな」

「うん、そんなら云つてやろう。君は乱暴である下宿で持て余まさされているんだ。いくら下宿の女房だつて、下女たあ違うぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじや、君に困つてゐるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物を一幅売りや、すぐ浮いてくるつて云つてたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎だ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになつたんだから、出ろと云うんだろう。君出てやれ」

「当たり前だ。居てくれと手を合せたつて、居るものか。一体そんな云い懸りを云うような所へ周旋する君からしてが不埒だ」

「おれが不埒か、君が大人しくないんだか、どつちかだろう」

山嵐もおれに劣らぬ肝癪持ちだから、負け嫌いな大きな声を出す。控所に居た連中は何事が始まつたかと思って、みんな、おれと山嵐の方を見て、顎を長くしてぼんやりしている。おれは、別に恥ずかしい事をした覚えはないんだから、立ち上がりながら、部屋中一通り見巡わしてやつた。みんなが驚ろいてるなかに野だけは面白そうに笑つていた。おれの大きな眼が、貴様も喧嘩をするつもりかと云う権幕で、野だの干瓢づらを射貫いた時に、野だは突然眞面目な顔をして、大いにつつしんだ。少し怖わかつたと見える。そのうち喇叭が鳴る。山嵐もおれも喧嘩を中止して教場へ出た。

午後は、先夜おれに対して無礼を働いた寄宿生の処分法についての会議だ。会議というものは生れて始めてだからとんと容子が分らないが、職員が寄つて、たかつて自分勝手な説をたてて、それを校長が好い加減に纏めるのだろう。纏めるというのは黑白の決しかねる事柄について云うべき言葉だ。この場合のようだ、誰が見たつて、不都合としか思われない事件に会議をするのは暇潰しだ。誰が何と解釈したつて異説の出ようはずがない。こんな明白なのは即座に校長が処分してしまえばいいに。随分決断のない事だ。校長つてものが、これならば、何の事はない、煮え切らない愚図の異名だ。

会議室は校長室の隣りにある細長い部屋で、平常は食堂の代理を勤める。黒い皮で張つた椅子が二十脚ばかり、長いテーブルの周囲に並んでちよつと神田の西洋料理屋ぐらいな格だ。そのテーブルの端に校長が坐つて、校長の隣りに赤シャツが構える。あと

は勝手次第に席に着くんだそうだが、体操の教師だけはいつも席末に謙遜するという話だ。おれは様子が分らないから、博物の教師と漢学の教師の間へはいり込んだ。向うを見ると山嵐と野だが並んでる。野だの顔はどう考へても劣等だ。喧嘩はしても山嵐の方が遙かに趣がある。おやじの葬式の時に小日向の養源寺の座敷にかかるてた懸物はこの顔によく似ている。坊主に聞いてみたら韋馱天と云う怪物だそうだ。今日は怒つてゐるから、眼をぐるぐる廻しちや、時々おれの方を見る。そんな事で威嚇かされてたまるもんかと、おれも負けない氣で、やつぱり眼をぐりつかせて、山嵐をにらめてやつた。おれの眼は恰好はよくないが、大きい事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときつと似合いますと清がよく云つたくらいだ。

もう大抵お揃いでしようかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考へていたが、これは足りないはずだ。唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の因縁かしらないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中をあるいていても、うらなり先生の様子が心に浮ぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺のなかに膨れている。挨拶をするとへえと恐縮して頭を下げるから氣の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めつたに笑つた事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知つてゐるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思つてたが、うらなり君に逢つてから始めて、やつぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐わろうかと、ひそかに目標にして來たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしようど、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版のような者を読んでいる。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だか私語き合つてゐる。手持無沙汰なのは鉛筆の尻に着いてる、護謨の頭でテーブルの上へしきりに何か書いてゐる。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が氣の毒そくにはいつて來て少々用事がありまして、遅刻致しましたと殷勤に狸に挨拶をした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒟蒻版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締の件、その他二三ヶ条である。狸は例の通りもつたいぶつて、教育の生靈という見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、

みんな自分の寡徳の致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるといそかに慚愧の念に堪えんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向つて謝罪しなければならん。しかしひとたび起つた以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事実はすでに諸君のご承知の通りであるからして、善後策について腹蔵のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉を聞いて、なるほど校長だの狸だと云うものは、えらい事を云うもんだと感心した。こう校長が何もかも責任を受けて、自分の咎だとか、不徳だとか云うくらいなら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職になつたら、よさそうなもんだ。そうすればこんな面倒な会議なんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識から云つても分つて。おれが大人しく宿直をする。生徒が乱暴をする。わるいのは校長でもなければ、生徒だけに極つて。もし山嵐が煽動したとすれば、生徒と山嵐を退治ればそれでたくさんだ。人の尻を自分で背負い込んで、おれの尻だ、おれの尻だと吹き散らかす奴が、どこの国にあるもんか、狸でなくつちや出来る芸当じやない。彼はこんな条理に適わない議論を吐いて、得意気に一同を見廻した。ところが誰も口を開くものが無い。博物の教師は第一教場の屋根に鳥がとまつてゐるのを眺めている。漢学の先生は蒟蒻版を畳んだり、延ばしたりして。山嵐はまだおれの顔をにらめている。会議と云うものが、こんな馬鹿氣たものなら、欠席して昼寝でもしている方がましだ。

おれは、じれつたくなつたから、一番大いに弁じてやろうと思つて、半分尻をあげかけたら、赤シャツが何か云い出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞のある絹ハンケチで顔をふきながら、何か云つてゐる。あの手巾はきっとマドンナから巻き上げたに相違ない。男は白い麻を使うもんだ。「私も寄宿生の乱暴を聞いてはなはだ教頭として不行届であり、かつ平常の徳化が少年に及ばなかつたのを深く慚ずるのであります。でこう云う事は、何か陥欠があると起るもので、事件その物を見ると何だか生徒だけがわるいようであるが、その真相を極めると責任はかえつて学校にあるかも知れない。だから表面上にあらわれたところだけで厳重な制裁を加えるのは、かえつて未来のためによくないかも思われます。かつ少年血氣のものであるから活氣があるで、善惡の考えはなく、半ば無意識にこんな悪戯をやる事はないとも限らん。でもとより処分法は校長のお考えにある事だから、私の容喙する限りではないが、どうかその辺をご斟酌になつて、なるべく寛大なお取計を願いたいと思います」

なるほど狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない教師が悪いんだと公言してゐる。

気狂が人の頭を撲り付けるのは、なぐられた人がわるいから、気狂がなぐるんだそうだ。難有い仕合せだ。活気にみちて困るなら運動場へ出て相撲でも取るがいい、半ば無意識に床の中へバッタを入れられてたまるものか。この様子じや寝顎をかかれても、半ば無意識だつて放免するつもりだらう。

おれはこう考えて何か云おうかなと考えてみたが、「云うなら人を驚ろすかように滔々と述べたてなくつちやつまらない、おれの癖として、腹が立つたときに口をきくと、二言か三言で必ず行き塞ってしまう。狸でも赤シャツでも人物から云うと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずい事を喋舌つて揚足を取られちや面白くない。ちよつと腹案を作つてみようと、胸のなかで文章を作つてゐる。すると前に居た野だが突然起立したには驚ろいた。野だの癖に意見を述べるなんて生意氣だ。野だは例のへらへら調で「實に今回のバッタ事件及び咄噺事件は吾々心ある職員をして、ひそかに吾校将来の前途に危惧の念を抱かしむるに足る珍事でありまして、吾々職員たるものはこの際奮つて自ら省りみて、全校の風紀を振肅しなければなりません。それでただ今校長及び教頭のお述べになつたお説は、實に肯綮に中つた剝切なお考へで私は徹頭徹尾賛成致します。どうかなるべく寛大のご処分を仰ぎたいと思ひます」と云つた。野だの云う事は言語はあるが意味がない、漢語をのべつに陳列するぎりで訳が分らない。分つたのは徹頭徹尾賛成致しますと云う言葉だけだ。

おれは野だの云う意味は分らないけれども、何だか非常に腹が立つたから、腹案も出来ないうちに起ち上がつてしまつた。「私は徹頭徹尾反対です……」と云つたがあとが急に出て来ない。「……そんな頓珍漢な、処分は大嫌いです」とつけたら、職員が一同笑い出した。「一体生徒が全然悪いです。どうしても詫まらせなくつちや、癖になります。退校さしても構いません。……何だ失敬な、新しく来た教師だと思つて……」と云つて着席した。すると右隣りに居る博物が「生徒がわるい事も、わるいが、あまり厳重な罰などをするとかえつて反動を起していけないでしよう。やっぱり教頭のおつしやる通り、寛な方に賛成します」と弱い事を云つた。左隣の漢学は穩便説に賛成と云つた。歴史も教頭と同説だと云つた。忌々しい、大抵のものは赤シャツ党だ。こんな連中が寄り合つて学校を立てていりや世話はない。おれは生徒をあやまらせるか、辞職するか二つのうち一つに極めてるんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰つて荷作りをする覚悟でいた。どうせ、こんな手合を弁口で屈伏させる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こつちでご免だ。学校に居ないとすればどうなつたつて構うもんか。また何か云うと笑うに違ひない。だれが云うもんかと澄していた。

すると今までだまつて聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓を振わせるような声で「私は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮してこれを翻弄しようとした所為とより外には認められんのであります。教頭はその源因を教師の人物いかんにお求めになるようでありますのが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃であります。この短かい二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がありません。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌を加える理由もありましようが、何らの原因もないのに新来の先生を愚弄するような軽薄な生徒を寛假しては学校の威信に関わる事と思います。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思います。もし反動が恐しいの、騒動が大きくなるのと姑息な事を云つた日にはこの弊風はいつ矯正出来るか知れません。かかる弊風を杜絶するためにこそ吾々はこの学校に職を奉じてゐるので、これを見逃がすくらいなら始めから教師にならん方がいいと思います。私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰に処する上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰を卸した。一同はだまつて何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかつた。おれの云おうと思うところをおれの代りに山嵐がすつかり言ってくれたようなのだ。おれはこう云う単純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有いと云う顔をもつて、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちょっと失念して言い落しましたから、申します。当夜の宿直員は宿直中外出して温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外の事と考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを幸に、場所もあろうに温泉などへ入湯にいくなどと云うのは大きな失体である。生徒は生徒として、この点については校長からとくに責任者にご注意あらん事を希望します」

妙な奴だ、ほめたと思つたら、あとからすぐ人の失策をあげてゐる。おれは何の気もなく、前の宿直が出あるいた事を知つて、そんな習慣だと思つて、つい温泉まで行つてしまつたんだが、なるほどそう云われてみると、これはおれが悪かった。攻撃されても仕方がない。そこでおれはまた起つて「私は正に宿直中に温泉に行きました。これは全くわるい。あやまります」と云つて着

席したら、一同がまた笑い出した。おれが何か云いさえすれば笑う。つまらん奴等だ。貴様等これほど自分のわるい事を公けにわるかつたと断言出来るか、出来ないから笑うんだろう。

それから校長は、もう大抵ご意見もないようでありますから、よく考えた上で処分しましようと云つた。ついでだからその結果を云うと、寄宿生は一週間の禁足になつた上に、おれの前へ出て謝罪をした。謝罪をしなければその時辞職して帰るところだつたがなまじい、おれのいう通りになつたのでどうどう大変な事になつてしまつた。それはあとから話すが、校長はこの時会議の引き続きだと号してこんな事を云つた。生徒の風儀は、教師の感化で正していかなくてはならん、その一着手として、教師はなるべく飲食店などに出入しない事にしたい。もつとも送別会などの節は特別であるが、単独にあまり上等でない場所へ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋だの、団子屋だの——と云いかけたらまた一同が笑つた。野だが山嵐を見て天麩羅と云つて目くばせをしたが山嵐は取り合わなかつた。いい気味だ。

おれは脳がわるいから、狸の云うことなんか、よく分らないが、蕎麦屋や団子屋へ行つて、中学の教師が勤まらなくつちや、おれみたような食い心棒にや到底出来つ子ないと思つた。それなら、それでいいから、初手から蕎麦と団子の嫌いなものと注文して雇うがいい。だんまりで辞令を下げておいて、蕎麦を食うな、団子を食うなど罪なお布令を出すのは、おれのような外に道楽のないものにとつては大変な打撃だ。すると赤シャツがまた口を出した。「元来中学の教師なぞは社会の上流にくらいするものだからして、単に物質的の快楽ばかり求めるべきものでない。その方に耽るどつい品性にわるい影響を及ぼすようになる。しかし人間だから、何か娯楽がないと、田舎へ来て狭い土地では到底暮せるものではない。それで釣に行くとか、文学書を読むとか、または新体詩や俳句を作るとか、何でも高尚な精神的娯楽を求めなくつてはいけない……」

だまつて聞いてると勝手な熱を吹く。沖へ行つて肥料を釣つたり、ゴルキが露西亞の文学者だつたり、馴染の芸者が松の木の下に立つたり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯楽なら、天麩羅を食つて団子を呑み込むのも精神的娯楽だ。そんな下さらない娯楽を授けるより赤シャツの洗濯でもするがいい。あんまり腹が立つたから「マドンナに逢うのも精神的娯楽ですか」と聞いてやつた。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互に眼と眼を見合せている。赤シャツ自身は苦しそうに下を向いた。それ見る。利いたろう。ただ氣の毒だったのはうらなり君で、おれが、こう云つたら蒼い顔をますます蒼くした。

おれは即夜下宿を引き払つた。宿へ帰つて荷物をまとめてると、女房が何か不都合でもございましたか、お腹の立つ事があるなら、云つておくれたら改めますと云う。どうも驚ろく。世の中にはどうして、こんな要領を得ない者ばかり揃つてゐるんだろう。出てもらいたいんだか、居てもらいたいんだか分りやしない。まるで気狂だ。こんな者を相手に喧嘩をしたつて江戸っ子の名折れだから、車屋をつれて来てさつさと出てきた。

出た事は出たが、どこへ行くというあてもない。車屋が、どちらへ参りますと云うから、だまつて尾いて来い、今にわかる、と云つて、すたすたやつて來た。面倒だから山城屋へ行こうかとも考えたが、また出なければならぬから、つまり手数だ。こうして歩いてゐるうちに下宿とか、何とか看板のあるうちを目付け出すだろう。そうしたら、そこが天意に叶つたわが宿と云う事にしよう。とぐるぐる、閑静で住みよさそうな所をあるいているうち、とうとう鍛冶屋町へ出てしまつた。ここは士族屋敷で下宿屋などのある町ではないから、もっと賑やかな方へ引き返そくかとも思つたが、ふといい事を考え付いた。おれが敬愛するうらなり君はこの町内に住んでゐる。うらなり君は土地の人で先祖代々の屋敷を控えているくらいだから、この辺の事情には通じてゐるに相違ない。あの人を尋ねて聞いたら、よさそうな下宿を教えてくれるかも知れない。幸一度挨拶に来て勝手は知つてゐるから、捜がしてあるく面倒はない。ここだらうと、いい加減に見当をつけて、ご免ご免と返ばかり云うと、奥から五十ぐらいな年寄が古風な紙燭をつけて、出て來た。おれは若い女も嫌いではないが、年寄を見ると何だかなつかしい心持ちがする。大方清がすきだから、その魂が方々のお婆さんに乗り移るんだろう。これは大方うらなり君のおつ母さんだらう。切り下げの品格のある婦人だが、よくうらなり君に似てゐる。まあお上がりと云うところを、ちょっとお目にかかりたいからと、主人を玄関まで呼び出して実はこれこれが君どこか心当りはありませんかと尋ねてみた。うらなり先生それはさぞお困りでございましよう、としばらく考えていたが、この裏町に萩野と云つて老人夫婦ぎりで暮らしているものがある、いつぞや座敷を明けておいても無駄だから、たしかな人があるなら貸してもいいから周旋してくれと頼んだ事がある。今でも貸すかどうか分らんが、まあいつしょに行つて聞いてみましよう、親切に連れて行つてくれた。

その夜から萩野の家の下宿人となつた。驚いたのは、おれがいか銀の座敷を引き払うと、翌日から入れ違いに野だが平氣な顔を

して、おれの居た部屋を占領した事だ。さすがのおれもこれにはあきれた。世の中はいかさま師ばかりで、お互に乗せっこをしているのかも知れない。いやになつた。

世間がこんなものなら、おれも負けない氣で、世間並にしなくちや、遣りきれない訳になる。巾着切の上前をはねなければ三度のご膳が戴けないと、事が極まればこうして、生きてるのも考え方だ。と云つてぴんぴんした達者なからだで、首を縊つちや先祖へ済まない上に、外聞が悪い。考えると物理学校などへはいつて、数学なんて役にも立たない芸を覚えるよりも、六百円を資本にして牛乳屋でも始めればよかつた。そうすれば清もおれの傍を離れずに済むし、おれも遠くから婆さんの事を心配しづに暮される。いつしょに居るうちは、そうでもなかつたが、こうして田舎へ来てみると清はやつぱり善人だ。あんな氣立のいい女は日本中さがして歩いたつてめつたにはない。婆さん、おれの立つときに、少々風邪を引いていたが今頃はどうしてるか知らん。先だつての手紙を見たらさぞ喜んだろう。それにしても、もう返事がきそなものが——おれはこんな事ばかり考えて二三日暮していた。

気になるから、宿のお婆さんに、東京から手紙は来ませんかと時々尋ねてみるが、聞くたんびに何にも参りませんと氣の毒そうな顔をする。この夫婦はいか銀とは違つて、もとが土族だけに双方共上品だ。爺さんが夜になると、変な声を出して謡をうたうには閉口するが、いか銀のようにお茶を入れましようと奥暗に出て来ないから大きに楽だ。お婆さんは時々部屋へ来ていろいろな話を聞く。どうして奥さんをお連れなさつて、いつしょにお出でなんだのぞなもしなどと質問をする。奥さんがあるように見えますかね。可哀想にこれでもまだ二十四ですぜと云つたらそれでも、あなた二十四で奥さんがおありなさるのは当たり前ぞなもしと冒頭を置いて、どこの誰さんは二十でお嫁をお貰いたの、どこの何とかさんは二十二で子供を一人お持ちたのと、何でも例を半ダースばかり挙げて反駁を試みたには恐れ入つた。それじや僕も二十四でお嫁をお貰いるけれ、世話をしておくれんかなと田舎言葉を真似て頼んでみたら、お婆さん正直に本当かなもしと聞いた。

「本当の本当のつて僕あ、嫁が貰いたくつて仕方がないんだ」

「そうじやろうがな、もし。若いうちは誰もそんなものじやけれ」この挨拶には痛み入つて返事が出来なかつた。

「しかし先生はもう、お嫁がおりなさるに極つどらい。私はちゃんと、もう、睨らんどるぞなもし」

「へえ、活眼だね。どうして、睨らんどるんですか」

「どうしててて。東京から便りはないか、便りはないかてて、毎日便りを待ち焦がれておいでのじやないかなもし」

「こいつあ驚いた。大変な活眼だ」

「中りましたらうがな、もし」

「そうですね。中つたかも知れませんよ」

「しかし今時の女子は、昔と違うて油断が出来んけれ、お気をお付けたがええぞなもし」「何ですかい、僕の奥さんが東京で間男でもこしらえて いますかい」

「いいえ、あなたの奥さんはたしかじやけれど……」

「それで、やつと安心した。それじや何を氣を付けるんですい」

「あなたのはたしか——あなたのはたしかじやが——」

「どこに不たしかなのが居ますかね」

「ここ等にも大分居ります。先生、あの遠山のお嬢さんを存知かなもし」

「いいえ、知りませんね」

「まだご存知ないかなもし。こちらであなた一番の別嬪さんじやがなもし。あまり別嬪さんじやけれ、学校の先生方はみんなマドンナマドンナと言ふといでのぞなもし。まだお聞きんのかなもし」

「うん、マドンナですか。僕あ芸者の名かと思つた」

「いいえ、あなた。マドンナと云うと唐人の言葉で、別嬪さんの事じやろうがなもし」

「そうかも知れないね。驚いた」

「大方画学の先生がお付けた名ぞなもし」

「野だがつけたんですかい」

「いいえ、あの吉川先生がお付けたのじやがなもし」

「そのマドンナが不たしかなんですかい」

「そのマドンナさんが不たしかなマドンナさんでな、もし」

「厄介だね。渾名の付いてる女にや昔から碌なものは居ませんからね。そうかも知れませんよ」

「ほん当にそうじやなもし。鬼神のお松じやの、姫妃のお百じやのて怖い女が居りましたなもし」

「マドンナもその同類なんですかね」

「そのマドンナさんがなもし、あなた。そらあの、あなたをここへ世話をされておくれた古賀先生なもし——の方の所へお嫁に行く約束が出来ていたのじやがなもし——」

「へえ、不思議なものですね。あのうらなり君が、そんな艶福のある男とは思わなかつた。人は見懸けによらない者だな。ちつと氣を付けよう」

「ところが、去年あすこのお父さんが、お亡くなりて、——それまではお金もあるし、銀行の株も持つてお出し、万事都合がよかつたのじやが——それからというものは、どういうものか急に暮し向きが思わしくなくなつて——つまり古賀さんがあまりお人が好き過ぎるけれ、お欺されたんぞなもし。それや、これやでお興入も延びているところへ、あの教頭さんがお出でて、是非お嫁にほしいとお云いるのじやがなもし」

「あの赤シャツがですか。ひどい奴だ。どうもあのシャツはただのシャツじやないと思つてた。それから?」

「人を頼んで懸合うておみると、遠山さんでも古賀さんに義理があるから、すぐには返事は出来かねて——まあよう考えてみようぐらいの挨拶をおしたのじやがなもし。すると赤シャツさんが、手蔓を求めて遠山さんの方へ出入をおしるようになつて、とうとうあなた、お嬢さんを手馴付けておしまいたのじやがなもし。赤シャツさんも赤シャツさんじやが、お嬢さんもお嬢さんじやてて、みんなが悪るく云いますのよ。いつたん古賀さんへ嫁に行くて承知をしどきながら、今さら学士さんがお出たけれ、その方に替えよてて、それじや今日様へ済むまいがなもし、あなた」

「全く済まないね。今日様どころか明日様にも明後日様にも、いつまで行つたつて済みっこありませんね」

「それで古賀さんにお気の毒じやてて、お友達の堀田さんが教頭の所へ意見をしにお行きたら、赤シャツさんが、あしは約束のあるもの横取りするつもりはない。破約になれば貴うかも知れんが、今のところは遠山家とただ交際をしているばかりじや、遠山家と交際をするには別段古賀さんに済まん事もなかろうとお云いるけれ、堀田さんも仕方がなしにお戻りたそうな。赤シャツさんと堀田さんは、それ以来折合がわるいといふ評判ぞなもし」

「よくいろいろな事を知つてますね。どうして、そんな詳しい事が分るんですか。感心しちまつた」

「狭いけれども分りますぞなもし」

分り過ぎて困るくらいだ。この容子じゃおれの天麩羅や団子の事も知つてゐかも知れない。厄介な所だ。しかしお蔭様でマドンナの意味もわかるし、山嵐と赤シャツの関係もわかるし大いに後学になつた。ただ困るのはどつちが悪る者だか判然しない。おれのような単純なものには白とか黒とか片づけてもらわないと、どつちへ味方をしていいか分らない。

「赤シャツと山嵐があ、どつちがいい人ですかね」

「山嵐て何ぞなもし」

「山嵐というのは堀田の事ですよ」

「そりや強い事は堀田さんの方が強そうじゃけれど、しかし赤シャツさんは学士さんじゃけれ、働きはある方ぞな、もし。それから優しい事も赤シャツさんの方が優しいが、生徒の評判は堀田さんの方がええというぞなもし」

「つまりどつちがいいんですかね」

「つまり月給の多い方が豪いのじやろうがなもし」

これじや聞いたつて仕方がないから、やめにした。それから二三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待遠さま。やつと参りました。と一本の手紙を持つて来てゆつくりご覧と云つて出て行つた。取り上げてみると清からの便りだ。符箋が二三枚ついてるから、よく調べると、山城屋から、いか銀の方へ廻して、いか銀から、萩野へ廻つて来たのである。その上山城屋では一週間ばかり逗留している。宿屋だけに手紙まで泊るつもりなんだろう。開いてみると、非常に長いもんだ。坊っちゃんの手紙を頂いてから、すぐ返事をかこうと思ったが、あいにく風邪を引いて一週間ばかり寝ていたものだから、つい遅くなつて済まない。その上今時のお嬢さんのように読み書きが達者でないものだから、こんなまずい字でも、かくのによつぽど骨が折れる。甥に代筆を頼もうと思つたが、せつかくあげるのに自分でかかなくつちや、坊っちゃんに済まないと思つて、わざわざ下たがきを一返して、それから清書をした。清書をするには二日で済んだが、下た書きをするには四日かかった。読みにくいかも知れないが、それでも一生懸命にかいだのだから、どうぞしまいまで読んでくれ。という冒頭で四尺ばかり何やらかやら認めてある。なるほど読みにくい。字がまずいばかりではない、大抵平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだか句読をつけのによつぽど骨が折れる。おれは焦つ勝ちな性分だから、こんな長くて、分りにくい手紙は、五円やるから読んでくれと頼まれても断わるのだが、こ

の時ばかりは眞面目になつて、始から終まで読み通した。読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味がつながらないから、また頭から読み直してみた。部屋のなかは少し暗くなつて、前の時より見にくく、なつたから、とうとう橡鼻へ出て腰をかけながら鄭寧に拝見した。すると初秋の風が芭蕉の葉を動かして、素肌に吹きつけた帰りに、読みかけた手紙を庭の方へなびかしたから、しまいぎわには四尺あまりの半切れがさらりさりと鳴つて、手を放すと、向うの生垣まで飛んで行きそうだ。おれはそんな事には構つていられない。坊っちゃんは竹を割つたような気性だが、ただ肝癪が強過ぎてそれが心配になる。——ほかの人に無暗に渾名なんか、つけるのは人に恨まれるもとになるから、やたらに使っちゃいけない、もしつけたら、清だけに手紙で知らせる。——田舎者は人がわるいそudsだから、氣をつけてひどい目に遭わないようにしろ。——気候だつて東京より不順に極つてゐるから、寝冷をして風邪を引いてはいけない。坊っちゃんの手紙はあまり短過ぎて、容子がよくわからないから、この次にはせめてこの手紙の半分ぐらいの長さのを書いてくれ。——宿屋へ茶代を五円やるのはいいが、あとで困りやしないか、田舎へ行つて頼りになるはお金ばかりだから、なるべく僨約して、万一の時に差支えないようにしなくつちやいけない。——お小遣がなくて困るかも知れないから、為替で十円あげる。——先だつて坊っちゃんからもらつた五十円を、坊っちゃんが、東京へ帰つて、うちを持つ時の足しにと思って、郵便局へ預けておいたが、この十円を引いてもまだ四十円あるから大丈夫だ。——なるほど女と云うものは細かいものだ。おれが橡鼻で清の手紙をひらつかせながら、考え込んでいると、しきりの襖を開けて、萩野のお婆さんが晩めしを持ってきた。まだ見てお出でのかなもし。えっぽど長いお手紙じやなもし、と云つたから、ええ大事な手紙だから風に吹かしては見、吹かしては見るんだと、自分でも要領を得ない返事をして膳についた。見ると今夜も薩摩芋の煮つけだ。ここらのうちは、いか銀よりも鄭寧で、親切で、しかも上品だが、惜しい事に食い物がまずい。昨日も芋、一昨日も芋で今夜も芋だ。おれは芋は大好きだと明言したには相違ないが、こう立てつづけに芋を食わされは命がつづかない。うらなり君を笑うどころか、おれ自身が遠からぬうちに、芋のうらなり先生になつちまう。清ならこんな時に、おれの好きな鮒のさし身か、蒲鉾のつけ焼を食わせるんだが、貧乏士族のけちん坊と来ちゃ仕方がない。どう考へても清といつしよでなくつちあ駄目だ。もしあの学校に長くでも居る模様なら、東京から召び寄せてやろう。天麩羅蕎麦を食つちゃならない、団子を食つちゃならない、それで下宿に居て芋ばかり食つて黄色くなつていろなんて、教育者はつらいものだ。禅宗坊主だつて、これよりは口に榮耀をさせているだろう。——おれは一皿の芋を平げて、机の抽斗から生卵を二つ出して、茶碗の縁でたたき割つて、ようやく凌いだ。生卵ででも營養をとらなくつちあ一週二十一時間の授業

が出来るものか。

今日は清の手紙で湯に行く時間が遅くなつた。しかし毎日行きつけたのを一日でも欠かすのは心持ちがわるい。汽車にでも乗つて出懸けようと、例の赤手拭をぶら下げて停車場まで来ると二三分前に発車したばかりで、少々待たなければならぬ。ベンチへ腰を懸けて、敷島を吹かしていると、偶然にもうらなり君がやつて來た。おれはさつきの話を聞いてから、うらなり君がなおさら気の毒になつた。平常から天地の間に居候をしているように、小さく構えているのがいかにも憐れに見えたが、今夜は憐れどころの騒ぎではない。出来るならば月給を倍にして、遠山のお嬢さんと明日から結婚さして、一ヶ月ばかり東京へでも遊びにやつてやりたい気がした矢先だから、やお湯ですか、さあ、こっちへお懸けなさいと威勢よく席を譲ると、うらなり君は恐れ入つた体裁で、いえ構うておくれなさるな、と遠慮だか何だかやつぱり立つて。少し待たなくつちや出ません、草臥れますからお懸けなさいとまた勧めてみた。実はどうかして、そばへ懸けてもらいたかつたくらいに氣の毒でたまらない。それではお邪魔を致しましょうとようやくおれの云う事を聞いてくれた。世の中には野だみたように生意氣な、出ないで済む所へ必ず顔を出す奴もいる。山嵐のようにおれが居なくつちや日本が困るだらうと云うような面を肩の上へ載せてる奴もいる。そうかと思うと、赤シャツのようにコスメチックと色男の問屋をもつて自ら任じているのもある。教育が生きてフロックコートを着ればおれになると云わぬばかりの狸もいる。日々それ相応に威張つてるんだが、このうらなり先生のように在れどもなきがごとく、人質に取られた人形のように大人しくしているのは見た事がない。顔はふくれているが、こんな結構な男を捨てて赤シャツに靡くなんて、マドンナもよつぼり気の知れないおきやんだ。赤シャツが何ダース寄つたつて、これほど立派な旦那様が出来るもんか。

「あなたはどつか悪いんじやありませんか。大分たいぎそこに見えますが……」「いえ、別段これという持病もないですが……」

「そりや結構です。からだが悪いと人間も駄目ですね」

「あなたは大分ご丈夫のようですね」

「ええ瘠せても病気はしません。病気なんてものあ大嫌いですか」

うらなり君は、おれの言葉を聞いてにやにやと笑つた。

ところへ入口で若々しい女の笑声が聞えたから、何心なく振り返つてみるとえらい奴が來た。色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人と、四十五六の奥さんとが並んで切符を売る窓の前に立つて。おれは美人の形容などが出来る男でないから何にも云え

ないが全く美人に相違ない。何だか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握つてみたような心持ちがした。年寄の方が背は低い。しかし顔はよく似ているから親子だろう。おれは、や、来たなどと思う途端に、うらなり君の事は全然忘れて、若い女の方ばかり見ていた。すると、うらなり君が突然おれの隣から、立ち上がり、そろそろ女の方へ歩き出したんで、少し驚いた。マドンナじゃないかと思つた。三人は切符所の前で軽く挨拶している。遠いから何を云つてるとか分らない。

停車場の時計を見るども五分で発車だ。早く汽車がくればいいがなと、話し相手が居なくなつたので待ち遠しく思つていると、また一人あわてて場内へ駆け込んで来たものがある。見れば赤シャツだ。何だかべらべら然たる着物へ縮緬の帯をだらしなく巻き付けて、例の通り金鎖りをぶらつかしている。あの金鎖りは贋物である。赤シャツは誰も知るまいと思って、見せびらかしているが、おれはちゃんと知つてゐる。赤シャツは駆け込んだなり、何かきよろきよろしてゐたが、切符売下所の前に話してゐる三人へ懇懃にお辞儀をして、何か二こと、三こと、云つたと思つたら、急にこつちへ向いて、例のごとく猫足にあるいて来て、や君も湯ですか、僕は乗り後れやしないかと思つて心配して急いで來たら、まだ三四分ある。あの時計はたしからんと、自分の金側を出して、二分ほどちがつてると云いながら、おれの傍へ腰を卸した。女の方はちつとも見返らないで杖の上に頬をのせて、正面ばかり眺めている。年寄の婦人は時々赤シャツを見るが、若い方は横を向いたままである。いよいよマドンナに違ひない。

やがて、ピューと汽笛が鳴つて、車がつく。待ち合せた連中はぞろぞろ吾れ勝に乗り込む。赤シャツはいの一号に上等へ飛び込んだ。上等へ乗つたつて威張れるどころではない、住田まで上等が五銭で下等が三銭だから、わずか一銭違いで上下の区別がつく。こういうおれでさえ上等を奮發して白切符を握つてゐんでもわかる。もつとも田舎者はけちだから、たつた二銭の出入でもすこぶる苦になると見えて、大抵は下等へ乗る。赤シャツのあとからマドンナとマドンナのお袋が上等へはいり込んだ。うらなり君は活版で押したように下等ばかりへ乗る男だ。先生、下等の車室の入口へ立つて、何だか躊躇の体であつたが、おれの顔を見るや否や思いきつて、飛び込んでしまつた。おれはこの時何となく氣の毒でたまらなかつたから、うらなり君のあとから、すぐ同じ車室へ乗り込んだ。上等の切符で下等へ乗るに不都合はなかろう。

温泉へ着いて、三階から、浴衣のなりで湯壺へ下りてみたら、またうらなり君に逢つた。おれは会議や何かでいざと極まる、咽喉が塞がつて饒舌れない男だが、平常は随分弁ずる方だから、いろいろ湯壺のなかでうらなり君に話しかけてみた。何だか憐れぱくつてたまらない。こんな時に一口でも先方の心を慰めてやるのは、江戸つ子の義務だと思つてゐる。ところがあいにくうらなり

君の方では、うまい具合にこつちの調子に乗ってくれない。何を云つても、えとかいえとかぎりで、しかもそのえといえが大分面倒らしいので、しまいにはとうとう切り上げて、こつちからご免蒙つた。

湯の中では赤シャツに逢わなかつた。もつとも風呂の数はたくさんあるのだから、同じ汽車で着いても、同じ湯壺で逢うとは極まつていない。別段不思議にも思わなかつた。風呂を出てみると、町内の両側に柳が植つて、柳の枝が丸るい影を往来の中へ落している。少し散歩でもしよう。北へ登つて町のはずれへ出ると、左に大きな門があつて、門の突き当りがお寺で、左右が妓楼である。山門のなかに遊廓があるなんて、前代未聞の現象だ。ちよつとはいつてみたいが、また狸から会議の時にやられるかも知れないから、やめて素通りにした。門の並びに黒い暖簾をかけた、小さな格子窓の平屋はおれが団子を食つて、しくじつた所だ。丸提灯に汁粉、お雑煮とかいたのがぶらさがつて、提灯の火が、軒端に近い一本の柳の幹を照らしている。食いたいなと思つたが我慢して通り過ぎた。

食いたい団子の食えないのは情ない。しかし自分の許嫁が他人に心を移したのは、なお情ないだろう。うらなり君の事を思うと、団子は愚か、三日ぐらい断食しても不平はこぼせない訳だ。本当に人間ほどあてにならないものはない。あの顔を見ると、どうしたつて、そんな不人情な事をしそうには思えないんだが——うつくしい人が不人情で、冬瓜の水膨れのような古賀さんが善良な君子なのだから、油断が出来ない。淡泊だと思った山嵐は生徒を煽動したと云うし。生徒を煽動したのかと思うと、生徒の処分を校長に逼るし。厭味で練りかためたような赤シャツが存外親切で、おれに余所ながら注意をしてくれるかと思うと、マドンナを胡魔化したり、胡魔化したのかと思うと、古賀の方が破談にならなければ結婚は望まないんだと云うし。いか銀が難癖をつけて、おれを追い出すかと思うと、すぐ野だ公が入れ替つたり——どう考へてもあてにならない。こんな事を清にかいてやつたら定めて驚く事だろう。箱根の向うだから化物が寄り合つてゐるんだと云うかも知れない。

おれは、性来構わない性分だから、どんな事でも苦にしないで今日まで凌いで來たのだが、ここへ来てからまだ一ヶ月立つか、立たないうちに、急に世のなかを物騒に思い出した。別段際だつた大事件にも出逢わないのに、もう五つ六つ年を取つたような気がする。早く切り上げて東京へ帰るのが一番よからう。などとそれからそれへ考へて、いつか石橋を渡つて野芹川の堤へ出た。川と云うとえらそうだが実は一間ぐらいな、ちょろちょろした流れで、土手に沿つて十二丁ほど下ると相生村へ出る。村には觀音様がある。

温泉の町を振り返ると、赤い灯が、月の光の中にかがやいている。太鼓が鳴るのは遊廓に相違ない。川の流れは浅いけれども早いから、神經質の水のようにやたらに光る。ぶらぶら土手の上をあるきながら、約三丁も来たと思つたら、向うに人影が見え出した。月に透かしてみると影は二つある。温泉へ来て村へ帰る若い衆かも知れない。それにしては唄もうたわない。存外静かだ。

だんだん歩いて行くと、おれの方が早足だと見えて、二つの影法師が、次第に大きくなる。一人は女らしい。おれの足音を聞きつけて、十間ぐらいの距離に逼つた時、男がたちまち振り向いた。月は後からさしている。その時おれは男の様子を見て、はてなと思つた。男と女はまた元の通りにあるき出した。おれは考えがあるから、急に全速力で追つ懸けた。先方は何の気もつかずに最初の通り、ゆるゆる歩を移している。今は話し声も手に取るように聞える。土手の幅は六尺ぐらいだから、並んで行けば三人がようやくだ。おれは苦もなく後ろから追い付いて、男の袖を擦り抜けざま、二足前へ出した踵をぐるりと返して男の顔を覗き込んだ。月は正面からおれの五分刈の頭から頬の辺りまで、会釈もなく照す。男はあつと小声に云つたが、急に横を向いて、もう帰ろうと女を促がすが早いか、温泉の方へ引き返した。

赤シャツは団太くて胡魔化すつもりか、気が弱くて名乗り損なつたのかしら。ところが狭くて困つてるのは、おればかりではなかつた。

八

赤シャツに勧められて釣に行つた帰りから、山嵐を疑ぐり出した。無い事を種に下宿を出ると云われた時は、いよいよ不埒な奴だと思った。ところが会議の席では案に相違して滔々と生徒厳罰論を述べたから、おや変だなど首を振つた。萩野の婆さんから、山嵐が、うらなり君のために赤シャツと談判をしたと聞いた時は、それは感心だと手を拍つた。この様子ではわる者は山嵐じやあるまい、赤シャツの方が曲つてゐるんで、好加減な邪推を実しやかに、しかも遠廻しに、おれの頭の中へ浸み込ましめたのであるまいと迷つてゐる矢先へ、野芹川の土手で、マドンナを連れて散歩なんかしている姿を見たから、それ以来赤シャツは曲者だと極めてしまつた。曲者だか何だかよくは分らないが、ともかくも善い男じやない。表と裏とは違つた男だ。人間は竹のようす直でなくつちや頼もしくない。真直なものは喧嘩をしても心持ちがいい。赤シャツのようなやさしいのと、親切なのと、高尚なのと、琥

珀のパイプとを自慢そうに見せびらかすのは油断が出来ない、めったに喧嘩も出来ないと思つた。喧嘩をしても、回向院の相撲のような心持ちのいい喧嘩は出来ないとthoughtた。そうなると一銭五厘の出入で控所全体を驚ろかした議論の相手の山嵐の方がはるかに人間らしい。会議の時に金壺眼をぐりつかせて、おれを睨めた時は憎い奴だと思ったが、あとで考えると、それも赤シャツのねちねちした猫撫声よりはましだ。実はあの会議が済んだあとで、よっぽど仲直りをしようかと思って、一こと二こと話しかけてみたが、野郎返事もしないで、まだ眼を剥つてみせたから、こつちも腹が立つてそのままにしておいた。

それ以来山嵐はおれと口を利かない。机の上へ返した一銭五厘はいまだに机の上に乗つてゐる。ほこりだらけになつて乗つている。おれは無論手が出せない、山嵐は決して持つて帰らない。この一銭五厘が二人の間の牆壁になつて、おれは話そうと思つても話せない、山嵐は頑として黙つてる。おれと山嵐には一銭五厘が祟つた。しまいには学校へ出て一銭五厘を見るのが苦になつた。

山嵐とおれが絶交の姿となつたに引き易えて、赤シャツとおれは依然として在來の関係を保つて、交際をつづけている。野芹川で逢つた翌日などは、学校へ出ると第一番におれの傍へ来て、君今度の下宿はいいですかのまたいつしょに露西亞文学を釣りに行こうじやないかのといろいろな事を話しかけた。おれは少々憎らしかつたから、昨夜は二返逢いましたねと云つたら、ええ停車場で——君はいつでもあの時分出掛けるのですか、遅いぢやないかと云う。野芹川の土手でもお目に懸りましたねと喰らわしてやつたら、いいえ僕はあつちへは行かない、湯にはいつて、すぐ帰つたと答えた。何もそんなに隠さないでもよからう、現に逢つてゐんだ。よく嘘をつく男だ。これで中学の教頭が勤まるなら、おれなんか大学総長がつとまる。おれはこの時からいよいよ赤シャツを信用しなくなつた。信用しない赤シャツとは口をきいて、感心している山嵐とは話をしてゐない。世の中は随分妙なものだ。

ある日の事赤シャツがちょっと君に話があるから、僕のうちまで来てくれと云うから、惜しいと思つたが温泉行きを欠勤して四時頃出掛け行つた。赤シャツは一人ものだが、教頭だけに下宿はとくの昔に引き払つて立派な玄関を構えている。家賃は九円五拾銭だそうだ。田舎へ来て九円五拾銭払えばこんな家へはいれるなら、おれも一つ奮発して、東京から清を呼び寄せて喜ばしてやろうと思つたくらいな玄関だ。頼むと云つたら、赤シャツの弟が取次に出て來た。この弟は学校で、おれに代数と算術を教わる至つて出来のわるい子だ。その癖渡りものだから、生れ付いての田舎者よりも人が悪い。

赤シャツに逢つて用事を聞いてみると、大将例の琥珀のパイプで、きな臭い烟草をふかしながら、こんな事を云つた。「君が来てくれてから、前任者の時代よりも成績がよくあがつて、校長も大いにいい人を得たと喜んでゐるので——どうか学校でも信頼し

ているのだから、そのつもりで勉強していただきたい」

「へえ、そうですか、勉強って今より勉強は出来ませんが——」

「今のくらいで充分です。ただ先だってお話しした事ですね、あれを忘れずにいて下さればいいのです」

「下宿の世話なんかするものあ劍呑だという事ですか」

「そう露骨に云うと、意味もない事になるが——まあ善いさ——精神は君にもよく通じている事と思うから。そこで君が今のように出精して下されば、学校の方でも、ちゃんと見てているんだから、もう少しして都合さえつけば、待遇の事も多少はどうにかなるだろうと思うんですがね」

「へえ、俸給ですか。俸給なんかどうでもいいんですが、上がれば上がった方がいいですね」

「それで幸い今度転任者が一人出来るから——もつとも校長に相談してみないと無論受け合えない事だが——その俸給から少しは融通が出来るかも知れないから、それで都合をつけるように校長に話してみようと思うんですがね」

「どうも難有う。だれが転任するんですか」

「もう発表になるから話しても差し支えないでしよう。実は古賀君です」

「古賀さんは、だつてここの人じやありませんか」

「こここの地の人ですが、少し都合があつて——半分は当人の希望です」

「どこへ行くんです」

「日向の延岡で——土地が土地だから一級俸上つて行く事になりました」

「誰か代りが来るんですか」

「代りも大抵極まつてるんです。その代りの具合で君の待遇上の都合もつくんです」

「はあ、結構です。しかし無理に上がらないでも構いません」

「とも角も僕は校長に話すつもりです。それで校長も同意見らしいが、追つては君にもつと働いて頂だかなくってはならんようになるかも知れないから、どうか今からそのつもりで覚悟をしてやってもらいたいですね」

「今より時間でも増すんですか」

「いいえ、時間は今より減るかも知れませんが——」

「時間が減つて、もつと働くんですか、妙だな」

「ちょっと聞くと妙だが、——判然とは今言いにくいが——まあつまり、君にもつと重大な責任を持つてもらうかも知れないという意味なんです」

おれには一向分らない。今より重大な責任と云えば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やつこさんなかなか辞職する気遣いはない。それに、生徒の人望があるから転任や免職は学校の得策であるまい。赤シャツの談話はいつでも要領を得ない。要領を得なくつても用事はこれで済んだ。それから少し雑談をしているうちに、うらなり君の送別会をやる事や、ついてはおれが酒を飲むかと云う問や、うらなり先生は君子で愛すべき人だと云う事や——赤シャツはいろいろ弁じた。しまいに話をかえて君俳句をやりますかと来たから、こいつは大変だと思って、俳句はやりません、さようならと、そそそこに帰つて來た。発句は芭蕉か髪結床の親方のやるものだ。数学の先生が朝顔やに釣瓶をとられてたまるものか。

帰つてうんと考え込んだ。世間には随分氣の知れない男が居る。家屋敷はもちろん、勤める学校に不足のない故郷がいやになつたからと云つて、知らぬ他国へ苦労を求めて出る。それも花の都の電車が通つてる所なら、まだしもだが、日向の延岡とは何の事だ。おれは船つきのいいここへ来てさえ、一ヶ月立たないうちにもう帰りたくなつた。延岡と云えば山の中も山の中も大変な山の中だ。赤シャツの云うところによると船から上がって、一日馬車へ乗つて、宮崎へ行つて、宮崎からまた一日車へ乗らなくつては着けないそうだ。名前を聞いてさえ、開けた所とは思えない。猿と人とが半々に住んでるような氣がする。いかに聖人のうらなり君だつて、好んで猿の相手になりたくないだろうに、何という物数奇だ。

ところへあいかわらず婆さんが夕食を運んで出る。今日もまた芋ですかいと聞いてみたら、いえ今日はお豆腐ぞなもじと云つた。どつちにしたつて似たものだ。

「お婆さんは日向へ行くそうですね」

「ほん当にお氣の毒じゃな、もし」

「お氣の毒だつて、好んで行くんなら仕方がないですね」「好んで行くて、誰がぞなもし」

「誰がぞなもしつて、当人がさ。古賀先生が物数奇に行くんじやありませんか」

「そりやあなた、大違ひの勘五郎ぞなもし」

「勘五郎かね。だつて今赤シャツがそう云いましたぜ。それが勘五郎なら赤シャツは嘘つきの法螺右衛門だ」

「教頭さんが、そうお云いるのはもつともじやが、古賀さんのお往きともないのももつともぞなもし」

「そんなら両方もつともなんですね。お婆さんは公平でいい。一体どういう訳なんですい」

「今朝古賀のお母さんが見えて、だんだん訳をお話したがなもし」

「どんな訳をお話したんです」

「あそこもお父さんがお亡くなりてから、あたし達が思うほど暮し向が豊かになうてお困りじやけれ、お母さんが校長さんにお頼みて、もう四年も勤めているものじやけれ、どうぞ毎月頂くものを、今少しふやしておくれんかて、あなた」

「なるほど」

「校長さんが、ようまあ考えてみとこうとお云いたげな。それでお母さんも安心して、今に増給のご沙汰があろぞ、今月か来月かと首を長くして待つておいでたところへ、校長さんがちよつと来てくれと古賀さんにお云いるけれ、行つてみると、気の毒だが学校は金が足りんけれ、月給を上げる訳にゆかん。しかし延岡になら空いた口があつて、そつちなら毎月五円余分にとれるから、お望み通りでよからうと思うて、その手続きにしたから行くがええと云われたげな。——」

「じゃ相談じやない、命令じやありませんか」

「さよよ。古賀さんはよそへ行つて月給が増すより、元のままでもええから、ここに居りたい。屋敷もあるし、母もあるからとお頼みたけれども、もうそう極めたあとで、古賀さんの代りは出来ていてるけれ仕方がないと校長がお云いたげな」

「へん人を馬鹿にしてら、面白くもない。じゃ古賀さんは行く気はないんですね。どうれで変だと思つた。五円ぐらい上がつたつて、あんな山の中へ猿のお相手をしに行く唐変木はまずないからね」

「唐変木で、先生なんぞなもし」

「何でもいいできあ、——全く赤シャツの作略だね。よくない仕打だ。まるで欺撃ですね。それでおれの月給を上げるなんて、不都合な事があるものか。上げてやるつたつて、誰が上がつてやるものか」

「先生は月給がお上りるのかなもし」

「上げてやるつて云うから、断わらうと思つうんです」

「何で、お断わりのぞなもし」

「卑怯でもあんた、月給を上げておくれたら、大人しく頂いておく方が得ぞなもし。若いうちはよく腹の立つものじやが、年をとつてから考えると、も少しの我慢じやあつたのに惜しい事をした。腹立てたためにこないな損をしたと悔るのが当り前じやけれ、お婆の言う事をきいて、赤シャツさんが月給をあげてやるとお言いたら、難有うと受けておおきなさいや」

「年寄の癖に余計な世話を焼かなくつてもいい。おれの月給は上がるうと下がるうとおれの月給だ」

婆さんはだまつて引き込んだ。爺さんは呑気な声を出して謡をうたつてゐる。謡というものは読んでわかる所を、やにむずかしい節をつけて、わざと分らなくする術だろう。あんな者を毎晩飽きずに唸る爺さんの気が知れない。おれは謡どころの騒ぎじやない。月給を上げてやろうと云うから、別段欲しくもなかつたが、入らない金を余しておくのももつたいないと思つて、よろしいと承知したのだが、転任したくないものを無理に転任させてその男の月給の上前を跳ねるなんて不人情な事が出来るものか。当人がもとの通りでいいと云うのに延岡下りまで落ちさせるとは一体どう云う了見だろう。太宰權帥でさえ博多近辺で落ちついたものだ。河合又五郎だつて相良でどまつてゐるじやないか。とにかく赤シャツの所へ行つて断わつて来なくつちあ氣が済まない。

小倉の袴をつけてまた出掛けた。大きな玄関へ突つ立つて頼むと云うと、また例の弟が取次に出て來た。おれの顔を見てまた來たかという眼付をした。用があれば二度だつて三度だつて来る。よる夜なかだつて叩き起さないとは限らない。教頭の所へご機嫌伺いにくるようなおれと見損つてるか。これでも月給が入らないから返しに來んだ。すると弟が今来客中だと云うから、玄関でいいからちよつとお目にかかりたいと云つたら奥へ引き込んだ。足元を見ると、畠付きの薄つぺらな、のめりの駒下駄がある。奥でもう万歳ですよと云う声が聞える。お客とは野だなど氣がついた。野だでなくては、あんな黄色い声を出して、こんな芸人じみた下駄を穿くものはない。

しばらくすると、赤シャツがランプを持つて玄関まで出て來て、まあ上がりたまえ、外の人じやない吉川君だ、と云うから、いえここでたくさんです。ちよつと話せばいいんです、と云つて、赤シャツの顔を見ると金時のようだ。野だ公と一杯飲んでると見

える。

「さつき僕の月給を上げてやるというお話をしたが、少し考へが変ったから断わりに来たんです」

赤シャツはランプを前へ出して、奥の方からおれの顔を眺めたが、とっさの場合返事をしかねて茫然としている。増給を断わる奴が世の中にたつた一人飛び出して来たのを不審に思つたのか、断わるにしても、今帰つたばかりで、すぐ出直してこなくつてもよさそうなものだと、呆れ返つたのか、または双方合併したのか、妙な口をして突つ立つたままである。

「あの時承知したのは、古賀君が自分の希望で転任するという話でしたからで……」

「古賀君は全く自分の希望で半ば転任するんです」

「そりや当人から、聞いたんじやありません」

「君は古賀君から、そう聞いたのですか」

「そりや当人から、聞いたんじやありません」

「じゃ誰からお聞きです」

「僕の下宿の婆さんが、古賀さんのおつ母さんから聞いたのを今日僕に話したのです」

「じゃ、下宿の婆さんがそう云つたのですね」

「まあそうです」

「それは失礼ながら少し違うでしよう。あなたのおつしやる通りだと、下宿屋の婆さんの云う事は信ずるが、教頭の云う事は信じないと云うように聞えるが、そういう意味に解釈して差支えないでしようか」

おれはちよつと困つた。文学士なんてものはやっぱりえらいものだ。妙な所へこだわつて、ねちねち押し寄せてくる。おれはよく親父から貴様はそそつかしくて駄目だ駄目だと云われたが、なるほど少々そそつかしいようだ。婆さんの話を聞いてはつと思つて飛び出して來たが、実はうらなり君にもうらなりのおつ母さんにも逢つて詳しい事情は聞いてみなかつたのだ。だからこう文學士流に斬り付けられると、ちよつと受け留めにくい。

正面からは受け留めにくいが、おれはもう赤シャツに対して不信任を心の中で申し渡してしまつた。下宿の婆さんもけちん坊の欲張り屋に相違ないが、嘘は吐かない女だ、赤シャツのように裏表はない。おれは仕方がないから、こう答えた。

「あなたの云う事は本当かも知れないですが——とにかく増給はご免蒙ります」

「それはますます可笑しい。今君がわざわざお出になつたのは増俸を受けるには忍びない、理由を見出したからのように聞えたが、その理由が僕の説明で取り去られたにもかかわらず増俸を否まるるのは少し解しかねるようですね」

「解しかねるかも知れませんがね。とにかく断わりますよ」

「そんなに否なら強いてとまでは云いませんが、そう一二三時間のうちに、特別の理由もないのに豹変しちゃ、将来君の信用にかかる」

「かかわっても構わないです」

「そんな事はないはずです、人間に信用ほど大切なものはありませんよ。よしんば今一步譲つて、下宿の主人が……」

「主人じやない、婆さんです」

「どちらでもよろしい。下宿の婆さんが君に話した事を事実としたところで、君の増給は古賀君の所得を削つて得たものではないでしょう。古賀君は延岡へ行かれる。その代りがくる。その代りが古賀君よりも多少低給で来てくれる。その剩余を君に廻わすと云うのだから、君は誰にも気の毒がる必要はないはずです。古賀君は延岡でただ今よりも栄進される。新任者は最初からの約束で安くくる。それで君が上がられれば、これほど都合のいい事はないと思うですがね。いやなら否でもいいが、もう一返うちでよく考えてみませんか」

おれの頭はあまりえらくないので、いつもなら、相手がこういう巧妙な弁舌を揮えば、おやそうかな、それじゃ、おれが間違つてたと恐れ入つて引きさがるのだけれども、今夜はそつは行かない。ここへ来た最初から赤シャツは何だか虫が好かなかつた。途中で親切な女みたような男だと思い返した事はあるが、それが親切でも何でもなさうなので、反動の結果今じやよつぱり厭になつてゐる。だから先がどれほど多く論理的に弁論を逞くよりも、堂々たる教頭流におれを遣り込めようとも、そんな事は構わない。議論のいい人が善人とはきまらない。遣り込められる方が悪人とは限らない。表向きは赤シャツの方が重々もつともだが、表向きがいくら立派だって、腹の中まで惚れさせる訳には行かない。金や威力や理屈で人間の心が買える者なら、高利貸でも巡査でも大学教授でも一番人にはされなくてはならない。中学の教頭ぐらいな論法でおれの心がどう動くものか。人間は好き嫌いで働くものだ。論法で働くものじゃない。

「あなたの云う事はもつともですが、僕は増給がいやになつたんですから、まあ断わります。考えたつて同じ事です。さようなら」と云いすぎて門を出た。頭の上には天の川が一筋かかっている。

九

うらなり君の送別会のあるという日の朝、学校へ出たら、山嵐が突然、君先だつてはいか銀が来て、君が乱暴して困るから、どうか出るように話してくれと頼んだから、真面目に受けて、君に出てやれと話したのだが、あとから聞いてみると、あいつは悪い奴で、よく偽筆へ贋落款などを押して売りつけるそうだから、全く君の事も出鱈目に違いない。君に懸物や骨董を売りつけて、商売にしようと思つてたところが、君が取り合わないで儲けがないものだから、あんな作りごとをこしらえて胡魔化したのだ。僕はあの人物を知らなかつたので君に大変失敬した勘弁したまえと長々しい謝罪をした。

おれは何とも云わずに、山嵐の机の上にあつた、一銭五厘をとつて、おれの蝦蟇口のなかへ入れた。山嵐は君それを引き込めるのかと不審そうに聞くから、うんおれは君に奢られるのが、いやだつたから、是非返すつもりでいたが、その後だんだん考えてみると、やつぱり奢つてもらう方がいいようだから、引き込ますんだと説明した。山嵐は大きな声をしてアハハハと笑いながら、そんなら、なぜ早く取らなかつたのだと聞いた。実は取ろう取ろうと思ってたが、何だか妙だからそのままにしておいた。近来は学校へ来て一銭五厘を見るのが苦になるくらいやだつたと云つたら、君はよつぱり負け惜しみの強い男だと云うから、君はよつぱり剛情張りだと答えてやつた。それから一人の間にこんな問答が起つた。

「君は一体どこの産だ」

「おれは江戸っ子だ」

「うん、江戸っ子か、道理で負け惜しみが強いと思つた」

「きみはどこだ」

「僕は会津だ」

「会津つばか、強情な訳だ。今日の送別会へ行くのかい」

「行くとも、君は？」

「おれは無論行くんだ。古賀さんが立つ時は、浜まで見送りに行こうと思つてゐるくらいだ」

「送別会は面白いぜ、出て見たまえ。今日は大いに飲むつもりだ」

「勝手に飲むがいい。おれは肴を食つたら、すぐ帰る。酒なんか飲む奴は馬鹿だ」

「君はすぐ喧嘩を吹き懸ける男だ。なるほど江戸っ子の軽跳な風を、よく、あらわしてやる」

「何でもいい、送別会へ行く前にちょっとおれのうちへお寄り、話しがあるから」

山嵐は約束通りおれの下宿へ寄つた。おれはこの間から、うらなり君の顔を見る度に気の毒でたまらなかつたが、いよいよ送別の今日となつたら、何だか憐れつぽくつて、出来る事なら、おれが代りに行つてやりたい様な気がした。それで送別会の席上で、大いに演説でもしてその行を盛にしてやりたいと思うのだが、おれのべらんめえ調子じや、到底物にならないから、大きな声を出す山嵐を雇つて、一番赤シャツの荒肝を挫いでやるうと考え付いたから、わざわざ山嵐を呼んだのである。

おれはまず冒頭としてマドンナ事件から説き出したが、山嵐は無論マドンナ事件はおれより詳しく述べてゐる。おれが野芹川の土手の話ををして、あれは馬鹿野郎だと云つたら、山嵐は君はだれを捕まえても馬鹿呼わりをする。今日学校で自分の事を馬鹿と云つたじゃないか。自分が馬鹿なら、赤シャツは馬鹿じやない。自分は赤シャツの同類じやないと主張した。それじや赤シャツは腑抜けの呆助だと云つたら、そうかもしれないと山嵐は大いに賛成した。山嵐は強い事は強いが、こんな言葉になると、おれより遙かに字を知つていかない。会津っぽなんてものはみんな、こんな、ものなんだろう。

それから増給事件と将来重く登用すると赤シャツが云つた話をしたら山嵐はふふんと鼻から声を出して、それじや僕を免職する考えだなどと云つた。免職するつもりだつて、君は免職になる氣かと聞いたら、誰がなるものか、自分が免職になるなら、赤シャツもいつしょに免職させてやると大いに威張つた。どうしていつしょに免職させる氣かと押し返して尋ねたら、そこはまだ考えていないと答えた。山嵐は強そうだが、智慧はあまりなさそうだ。おれが増給を断わつたと話したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいと賞めてくれた。

うらなりが、そんなに厭がつてゐるなら、なぜ留任の運動をしてやらなかつたと聞いてみたら、うらなりから話を聞いた時は、

既にきまつてしまつて、校長へ二度、赤シャツへ一度行つて談判してみたが、どうする事も出来なかつたと話した。それについても古賀があまり好人物過ぎるから困る。赤シャツから話があつた時、断然断わるか、一応考えてみますと逃げればいいのに、あの弁舌に胡魔化されて、即席に許諾したものだから、あとからお母さんが泣きついても、自分が談判に行つても役に立たなかつたと非常に残念がつた。

今度の事件は全く赤シャツが、うらなりを遠ざけて、マドンナを手に入れる策略なんだろうとおれが云つたら、無論そうに違ひない。あいつは大人しい顔をして、悪事を働いて、人が何か云うと、ちゃんと逃道を拵えて待つてゐるんだから、よっぽど奸物だ。あんな奴にかかるては鉄拳制裁でなくつちゃ利かないと、瘤だらけの腕をまくつてみせた。おれはついでだから、君の腕は強そうだな柔術でもやるかと聞いてみた。すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちょっと攫んでみると云うから、指の先で揉んでみたら、何の事はない湯屋にある軽石の様なものだ。

おれはあまり感心したから、君そのくらいの腕なら、赤シャツの五人や六人は一度に張り飛ばされるだろうと聞いたら、無論さと云いながら、曲げた腕を伸ばしたり、縮ましたりすると、力瘤がぐるりぐるりと皮のなかで廻転する。すごぶる愉快だ。山嵐の証明する所によると、かんじん綺りを一本より合せて、この力瘤の出る所へ巻きつけて、うんと腕を曲げると、ぶつりと切れるそうだ。かんじんよりなら、おれにも出来そうだと云つたら、出来るものか、出来るならやつてみろと来た。切れないと外聞がわるいから、おれは見合せた。

君どうだ、今夜の送別会に大いに飲んだあと、赤シャツと野だを撲つてやらなかと面白半分に勧めてみたら、山嵐はそうだと考えていたが、今夜はまあよそと云つた。なぜと聞くと、今夜は古賀に気の毒だから——それにどうせ撲るくらいなら、あいつらの悪い所を見届けて現場で撲らなくつちゃ、こつちの落度になるからと、分別のありそな事を附加した。山嵐でもおれよりは考えがあると見える。

じや演説をして古賀君を大いにほめてやれ、おれがすると江戸っ子のペラペラになつて重みがなくていけない。そうして、きまつた所へ出ると、急に溜飲が起つて咽喉の所へ、大きな丸が上がつて来て言葉が出ないから、君に譲るからと云つたら、妙な病気だな、じや君は人中じや口は利けないんだね、困るだろう、と聞くから、何そんなに困りやしないと答えておいた。

そうこうするうち時間が來たから、山嵐と一所に会場へ行く。会場は花晨亭といつて、当地で第一等の料理屋だそうだが、おれ

は一度も足を入れた事がない。もとの家老とかの屋敷を買い入れて、そのまま開業したという話だが、なるほど見懸からして厳めしい構えだ。家老の屋敷が料理屋になるのは、陣羽織を縫い直して、胴着にする様なものだ。

二人が着いた頃には、人数ももう大概揃つて、五十畳の広間に二つ三つ人間の塊が出来ている。五十畳だけに床は素敵に大きい。おれが山城屋で占領した十五畳敷の床とは比較にならない。尺を取つてみたら一間あつた。右の方に、赤い模様のある瀬戸物の瓶を据えて、その中に松の大きな枝が挿してある。松の枝を挿して何にする気か知らないが、何ヶ月立つても散る気遣いがないから、錢が懸らなくつて、よからう。あの瀬戸物はどこで出来るんだと博物の教師に聞いたたら、あれは瀬戸物じやありません、伊万里ですと云つた。伊万里、だつて瀬戸物じやないかと、云つたら、博物はえへへへと笑つていた。あとで聞いてみたら、瀬戸で出来る焼物だから、瀬戸と云うのだそうだ。おれは江戸っ子だから、陶器の事を瀬戸物というのかと思っていた。床の真中に大きな懸物があつて、おれの顔くらいな大きさな字が二十八字かいてある。どうも下手なものだ。あんまり不味いから、漢学の先生に、なぜあんなまずいものを麗々と懸けておくんですと尋ねたところ、先生はあれは海屋といつて有名な書家のかいだ者だと教えてくれた。海屋だか何だか、おれは今だに下手だと思つている。

やがて書記の川村がどうかお着席をと云うから、柱があつて靠りかかるのに都合のいい所へ坐つた。海屋の懸物の前に狸が羽織、袴で着席すると、左に赤シャツが同じく羽織袴で陣取つた。右の方は主人公だというのどうなり先生、これも日本服で控えている。おれは洋服だから、かしこまるのが窮屈だったから、すぐ胡坐をかいた。隣りの体操教師は黒ずぼんで、ちゃんととかしこまつていて。体操の教師だけにいやに修行が積んでいる。やがてお膳が出る。徳利が並ぶ。幹事が立つて、一言開会の辞を述べる。それから狸が立つ。赤シャツが起つ。ことごとく送別の辞を述べたが、三人共申し合せたようにうらなり君の、良教師で好人物な事を吹聴して、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、ご一身上のご都合で、切に転任をご希望になつたのだから致し方がないという意味を述べた。こんな嘘について送別会を開いて、それでちつとも恥かしいとも思つていない。ことに赤シャツに至つて三人のうちで一番うらなり君をほめた。この良友を失うのは實に自分にとって大なる不幸であるとまで云つた。しかもそのいい方がいかにも、もつともらしくつて、例のやさしい声を一層やさしくして、述べ立てるのだから、始めて聞いたものは、誰でもきつとだまされるに極つてゐる。マドンナも大方この手で引掛けたんだろう。赤シャツが送別の辞を述べ立てている最中、向側に坐つていた山嵐がおれの顔を見てちょっと稻光をさした。おれは返電として、人

指し指でべつかんこうをして見せた。

赤シャツが座に復するのを待ちかねて、山嵐がぬつと立ち上がつたから、おれは嬉しかつたので、思わず手をぱちぱちと拍つた。すると狸を始め一同がことごとくおれの方を見たには少々困つた。山嵐は何を云うかと思うとただ今校長始めことに教頭は古賀君の転任を非常に残念がられたが、私は少々反対で古賀君が一日も早く当地を去られるのを希望しております。延岡は僻遠の地で、当地に比べたら物質上の不便はあるだろう。が、聞くところによれば風俗のすこぶる淳朴な所で、職員生徒ことごとく上代権直の氣風を帶びてゐるそうである。心にもないお世辞を振り蒼いたり、美しい顔をして君子を陥れたりするハイカラ野郎は一人もないと信ずるからして、君のごとき温良篤厚の士は必ずその地方一般の歓迎を受けられるに相違ない。吾輩は大いに古賀君のためにこの転任を祝するのである。終りに臨んで君が延岡に赴任されたら、その地の淑女にして、君子の好逑となるべき資格あるものを抜んで一日も早く円満なる家庭をかたち作つて、かの不貞無節なるお転婆を事実の上において慚死せしめん事を希望します。えへんえへんと二つばかり大きな咳払いをして席に着いた。おれは今度も手を叩こうと思ったが、またみんながおれの面を見るといやだから、やめにしておいた。山嵐が坐ると今度はうらなり先生が起つた。先生はご鄭寧に、自席から、座敷の端の末座まで行つて、殷懃に一同に挨拶をした上、今般は一身上の都合で九州へ参る事になりましたについて、諸先生方が小生のためにこの盛大なる送別会をお開き下さつたのは、まことに感銘の至りに堪えぬ次第で——ことにただ今は校長、教頭その他諸君の送別の辞を頂戴して、大いに難有く服膺する訳であります。私はこれから遠方へ参りますが、なにとぞ従前の通りお見捨てなくご愛顧のほどを願います。とへえつく張つて席に戻つた。うらなり君はどこまで人が好いんだか、ほんと底が知れない。自分がこんなに馬鹿にされている校長や、教頭に恭しくお礼を云つてゐる。それも義理一遍の挨拶ならだが、あの様子や、あの言葉つきや、あの顔つきから云うと、心から感謝しているらしい。こんな聖人に眞面目にお礼を云われたら、気の毒になつて、赤面しそうなものだが狸も赤シャツも眞面目に謹聴しているばかりだ。

挨拶が済んだら、あちらでもチュー、こちらでもチュー、という音がする。おれも真似をして汁を飲んでみたがまずいもんだ。口取に蒲鉾はついてるが、どす黒くて竹輪の出来損ないである。刺身も並んでるが、厚くつて鮪の切り身を生で食ふと同じ事だ。それでも隣り近所の連中はむしやむしや『旨』そうに食つてゐる。大方江戸前の料理を食つた事がないんだろう。

そのうち爛徳利が頻繁に往来し始めたら、四方が急に賑やかになつた。野だ公は恭しく校長の前へ出て盃を頂いてる。いやな奴

だ。うらなり君は順々に献酬をして、一巡周るつもりとみえる。はなはだご苦労である。うらなり君がおれの前へ来て、一つ頂戴致しましようと袴のひだを正して申し込まれたから、おれも窮屈にズボンのままかしこまつて、一盃差し上げた。せつかく参つて、すぐお別れになるのは残念ですね。ご出立はいつです、是非浜までお見送りをしましようと云つたら、うらなり君はいえご用多のところ決してそれには及びませんと答えた。うらなり君が何と云つたつて、おれは学校を休んで送る気でいる。

それから一時間ほどするうちに席上は大分乱れて来る。まあ一杯、おや僕が飲めと云うのに……などと呂律の巡りかねるのも一人一人出来て来た。少々退屈したから便所へ行つて、昔風な庭を星明りにすかして眺めていると山嵐が来た。どうださつきの演説はうまかつたろう。と大分得意である。大賛成だが一ヶ所気に入らないと抗議を申し込んだら、どこが不賛成だと聞いた。「美しい顔をして人を陥れるようなハイカラ野郎は延岡に居らないから……と君は云つたろう」

「うん」

「ハイカラ野郎だけでは不足だよ」

「じゃ何と云うんだ」

「ハイカラ野郎の、ペテン師の、イカサマ師の、猫被りの、香具師の、モモンガーの、岡つ引きの、わんわん鳴けば犬も同然な奴とでも云うがいい」

「おれには、そう舌は廻らない。君は能弁だ。第一単語を大変たくさん知つてゐる。それで演舌が出来ないのは不思議だ」「なにこれは喧嘩のときに使おうと思つて、用心のために取つておく言葉さ。演舌となつちや、こうは出ない」

「そうかな、しかしひらぺら出るぜ。もう一遍やつて見たまえ」

「何遍でもやるさいいか。——ハイカラ野郎のペテン師の、イカサマ師の……」と云いかけていると、椽側をどたばた云わして、二人ばかり、よろよろしながら駆け出して來た。

「両君そりやひどい、——逃げるなんて、——僕が居るうちは決して逃さない、さあのみたまえ。——いかさま師?——面白い、いかさま面白い。——さあ飲みたまえ」

とおれと山嵐をぐいぐい引っ張つて行く。実はこの兩人共便所に來たのだが、酔つてゐるもんだから、便所へはいるのを忘れて、おれ等を引っ張るのだろう。酔つ払いは目の中る所へ用事を拵えて、前の事はすぐ忘れてしまふんだろう。

「さあ、諸君、いかさま師を引っ張つて来た。さあ飲ましてくれたまえ。いかさま師をうんと云うほど、酔わしてくれたまえ。君逃げちやいかん」

と逃げもせぬ、おれを壁際へ压し付けた。諸方を見廻してみると、膳の上に満足な肴の乗つているのは一つもない。自分の分を奇麗に食い尽して、五六間先へ遠征に出た奴もいる。校長はいつ帰つたか姿が見えない。

ところへお座敷はこちら? と芸者が三四人はいって来た。おれも少し驚いたが、壁際へ压し付けられているんだから、じつとしてただ見ていた。すると今まで床柱へもたれて例の琥珀のパイプを自慢そうに噛えていた、赤シャツが急に起つて、座敷を出にかかつた。向うからはいって来た芸者の一人が、行き違ひながら、笑つて挨拶をした。その一人は一番若くて一番奇麗な奴だ。遠くで聞えなかつたが、おや今晚はぐらい云つたらしい。赤シャツは知らん顔をして出て行つたぎり、顔を出さなかつた。大方校長のあとを追懸けて帰つたんだろう。

芸者が来たら座敷中急に陽気になつて、一同が鬨の声を揚げて歓迎したのかと思うくらい、騒々しい。そうしてある奴はなんこを攫む。その声の大きな事、まるで居合抜の稽古のようだ。こつちでは拳を打つて。よつ、はつ、と夢中で両手を振るところは、ダーク一座の操人形よりよっぽど上手だ。向うの隅ではおいお酌だ、と徳利を振つてみて、酒だ酒だと言ひ直している。どうもやかましくて騒々しくつてたまらない。そのうちで手持無沙汰に下を向いて考え込んでるのはうらなり君ばかりである。自分のために送別会を開いてくれたのは、自分の転任を惜んでくれるんじゃない。みんなが酒を呑んで遊ぶためだ。自分独りが手持無沙汰で苦しむためだ。こんな送別会なら、開いてもらわない方がよっぽどましだ。

しばらくしたら、めいめい胴間声を出して何か唄い始めた。おれの前へ来た一人の芸者が、あんた、なんぞ、唄いなはれ、と三味線を抱えたから、おれは唄わない、貴様唄つてみろと云つたら、金や太鼓でねえ、迷子の迷子の三太郎と、どんどんどこ、どんのちゃんちきりん。叩いて廻つて逢われるものならば、わたしなんぞも、金や太鼓でどんどんどこ、どんのちゃんちきりんと叩いて廻つて逢いたい人がある、と二た息にうたつて、おおしんどと云つた。おおしんどなら、もつと楽なものをやればいいのに。

すると、いつの間にか傍へ来て坐つた、野だが、鈴ちゃん逢いたい人に逢つたと思つたら、すぐお帰りで、お氣の毒さまみたようでげすと相変らず嘶し家みたような言葉使いをする。知りまへんと芸者はつんと済ました。野だけは頓着なく、たまたま逢いは逢いながら……と、いやな声を出して義太夫の真似をやる。おきなはれやと芸者は平手で野だの膝を叩いたら野だは恐悦して笑つて

る。この芸者は赤シャツに挨拶をした奴だ。芸者に叩かれて笑うなんて、野だもおめでたい者だ。鈴ちゃん僕が紀伊の国を踊るから、一つ弾いて頂戴と云い出した。野だはこの上まだ踊る気でいる。

向うの方で漢学のお爺さんが歯のない口を歪めて、そりや聞えません伝兵衛さん、お前とわたしのその中は……とまでは無事に済したが、それから? と芸者に聞いている。爺さんなんて物覚えのわるいものだ。一人が博物を捕まえて近頃こないなのが、でけましたぜ、弾いてみまほうか。よう聞いて、いなはれや——花月巻、白いリボンのハイカラ頭、乗るは自転車、弾くはヴァイオリン、半可の英語でペらペらと、I am glad to see youと唄うと、博物はなるほど面白い、英語入りだねと感心している。

山嵐は馬鹿に大きな声を出して、芸者、芸者と呼んで、おれが剣舞をやるから、三味線を弾けと号令を下した。芸者はあまり乱暴な声なので、あっけに取られて返事もしない。山嵐は委細構わず、ステッキを持って来て、踏破千山万岳烟と真中へ出て独りで隠し芸を演じている。ところへ野だがすでに紀伊の国を済まして、かつぽれを済まして、棚の達磨さんを済して丸裸の越中輝一つになつて、棕梠箒を小脇に抱い込んで、日清談判破裂して……と座敷中練りあるき出した。まるで気違ひだ。

おれはさつきから苦しそうに袴も脱がず控えているうらなり君が氣の毒でたまらなかつたが、なんぼ自分の送別会だつて、越中輝の裸躊まで羽織袴で我慢してみては必要はあるまいと思つたから、そばへ行つて、古賀さんもう帰りましようと退去を勧めてみた。するとうらなり君は今日は私の送別会だから、私が先へ帰つては失礼です、どうぞ遠慮なくと動く景色もない。なに構うもんですか、送別会なら、送別会らしくするがいいです、あの様をご覧なさい。氣狂会です。さあ行きましょと、進まないのを無理に勧めて、座敷を出かかるところへ、野だが箒を振り振り進行して来て、やご主人が先へ帰るとはひどい。日清談判だ。帰せないと箒を横にして行く手を塞いだ。おれはさつきから肝癪が起つてゐるところだから、日清談判なら貴様はちゃんとちやんだらうと、いきなり拳骨で、野だの頭をぽかりと喰わしてやつた。野だは二三秒の間毒氣を抜かれた体で、ぼんやりしていたが、おやこれはひどい。お撲ちになつたのは情ない。この吉川をご打擲とは恐れ入つた。いよいよもつて日清談判だ。とわからぬ事をならべてゐるところへ、うしろから山嵐が何か騒動が始まつたと見てとつて、剣舞をやめて、飛んできたが、このていたらくを見て、いきなり頸筋をうんと攫んで引き戻した。日清……いたい。いたい。どうもこれは乱暴だと振りもがくところを横に捩つたら、すとんど倒れた。あとはどうなつたか知らない。途中でうらなり君に別れて、うちへ帰つたら十一時過ぎだつた。

祝勝会で学校はお休みだ。練兵場で式があるので、狸は生徒を引率して参列しなくてはならない。おれも職員の一人としていつしょにくつついて行くんだ。町へ出ると日の丸だけで、まぼしいくらいである。学校の生徒は八百人もあるのだから、体操の教師が隊伍を整えて、一組一組の間を少しづつ明けて、それへ職員が一人か二人ずつ監督として割り込む仕掛けである。仕掛けはすこぶる巧妙なものだが、実際はすこぶる不手際である。生徒は小供の上に、生意氣で、規律を破らなくっては生徒の体面にかかるわると思つてゐる奴等だから、職員が幾人ついて行つたつて何の役に立つもんか。命令も下さないので勝手な軍歌をうたつたり、軍歌をやめるとワーレーと訳もないのに鬨の声を揚げたり、まるで浪人が町内をねりあるいてるようなものだ。軍歌も鬨の声も揚げない時はがやがや何か喋舌つてる。喋舌らないでも歩けそなもんだが、日本人はみな口から先へ生れるのだから、いくら小言を云つたつて聞きつこない。喋舌るのもただ喋舌るのではない、教師のわる口を喋舌るんだから、下等だ。おれは宿直事件で生徒を謝罪さして、まあこれならよかるうと思つていた。ところが実際は大違ひである。下宿の婆さんの言葉を借りて云えば、正に大違ひの勘五郎である。生徒があやまつたのは心から後悔してあやまつたのではない。ただ校長から、命令されて、形式的に頭を下げたのである。商人が頭ばかり下げて、狡い事をやめないと一般で生徒も謝罪だけはするが、いたずらは決してやめるものでない。よく考えてみると世の中はみんなこの生徒のようなものから成立しているかも知れない。人があやまつたり詫びたりするのを、眞面目に受けて勘弁するのは正直過ぎる馬鹿と云うんだろう。あやまるのも仮りにあやまるので、勘弁するのも仮りに勘弁するのだと思つてれば差し支えない。もし本当にあやまらせる気なら、本当に後悔するまで叩きつけなくてはいけない。

おれが組と組の間にはいつて行くと、天麩羅だの、団子だの、と云う声が絶えずする。しかも大勢だから、誰が云うのだか分らない。よし分つてもおれの事を天麩羅と云つたんじやありません、団子と申したのじやありません、それは先生が神經衰弱だから、ひがんで、そう聞くんだぐらい云うに極まつてゐる。こんな卑劣な根性は封建時代から、養成したこの土地の習慣なんだから、いくら云つて聞かしたつて、教えてやつたつて、到底直りつこない。こんな土地に一年も居ると、潔白なおれも、この真似をしなければならなく、なるかも知れない。向うでうまく言い抜けられるような手段で、おれの顔を汚すのを抛つておく、樗蒲一はない。向こうが人ならおれも人だ。生徒だつて、子供だつて、ずう体はおれより大きいや。だから刑罰として何か返報をしてやらなくつて

は義理がわるい。ところがこっちから返報をする時分に尋常の手段で行くと、向うから逆撃を食わして来る。貴様がわるいからだと云うと、初手から逃げ路が作つてある事だから滔々と弁じ立てる。弁じ立てておいて、自分の方を表向きだけ立派にしてそれからこっちの非を攻撃する。もともと返報にした事だから、こちらの弁護は向うの非が拳がらない上は弁護にならない。つまりは向うから手を出しておいて、世間体はこっちが仕掛けた喧嘩のように、見做されてしまう。大変な不利益だ。それなら向うのやるなり、愚迂多良童子を極め込んでいれば、向うはますます増長するばかり、大きく云えば世の中のためにならない。そこで仕方がないから、こっちも向うの筆法を用いて捕まえられないで、手の付けようのない返報をしなくてはならなくなる。そうなつては江戸っ子も駄目だ。駄目だが一年もこうやられる以上は、おれも人間だから駄目でも何でもそうならなくっちゃ始末がつかない。どうしても早く東京へ帰つて清といつしょになるに限る。こんな田舎に居るのは堕落しに来ているようなものだ。新聞配達をしたつて、ここまで墮落するよりはましだ。

こう考えて、いやいや、附いてくると、何だか先鋒が急にがやがや騒ぎ出した。同時に列はぴたりと留まる。変だから、列を右へはずして、向うを見ると、大手町を突き当つて薬師町へ曲がる角の所で、行き詰つたぎり、押し返したり、押し返されたりして揉み合つてゐる。前方から静かに静かにと声を涸らして来た体操教師に何ですと聞くと、曲り角で中学校と師範学校が衝突したんだと云う。

中学と師範とはどこの県下でも犬と猿のように仲がわるいそうだ。なぜだかわからないが、まるで気風が合わない。何かあると喧嘩をする。大方狭い田舎で退屈だから、暇潰しにやる仕事なんだろう。おれは喧嘩は好きな方だから、衝突と聞いて、面白半分に馳け出して行つた。すると前方にいる連中は、しきりに何だ地方税の癖に、引き込めど、怒鳴つてる。後ろからは押せ押せと大きな声を出す。おれは邪魔になる生徒の間をくぐり抜けて、曲がり角へもう少しで出ようとした時に、前へ！ と云う高く鋭い号令が聞えたと思つたら師範学校の方は肅肅として行進を始めた。先を争つた衝突は、折合がついたには相違ないが、つまり中学校が一步を譲つたのである。資格から云うと師範学校の方が上だそうだ。

祝勝の式はすこぶる簡単なものであつた。旅団長が祝詞を読む、知事が祝詞を読む、参列者が万歳を唱える。それでおしまいだ。余興は午後にあると云う話だから、ひとまず下宿へ帰つて、こないだじゅうから、気に掛つていた、清への返事をかけた。今度はもつと詳しく書いてくれとの注文だから、なるべく念入に認めなくっちゃならない。しかしいざとなつて、半切を取り上げると、

書く事はたくさんあるが、何から書き出していいか、わからない。あれにしようか、あれは面倒臭い。これにしようか、これはつまらない。何か、すらすらと出て、骨が折れなくつて、そうして清が面白がるようなものはないかしらん、と考えてみると、そんな注文通りの事件は一つもなさそうだ。おれは墨を磨つて、筆をしめして、卷紙を睨めて、——卷紙を睨めて、筆をしめして、墨を磨つて——同じ所作を同じように何返も繰り返したあと、おれには、とても手紙は書けるものではないと、諦めて硯の蓋をしてしまった。手紙なんぞをかくのは面倒臭い。やっぱり東京まで出掛けで行つて、逢つて話をするのが簡便だ。清の心配は察しないでもないが、清の注文通りの手紙を書くのは三七日の断食よりも苦しい。

おれは筆と巻紙を抛り出して、ごろりと転がつて肱枕をして庭の方を眺めてみたが、やっぱり清の事が気にかかる。その時おれはこう思つた。こうして遠くへ来てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真心は清に通じるに違いない。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。やらなければ無事で暮してると思つてただろ。たよりは死んだ時か病気の時か、何か事の起つた時にやりさえすればいい訳だ。

庭は十坪ほどの平庭で、これという植木もない。ただ一本の蜜柑があつて、塀のそとから、目標になるほど高い。おれはうちへ帰ると、いつでもこの蜜柑を眺める。東京を出た事のないものには蜜柑の生つているところはすこぶる珍しいものだ。あの青い実がだんだん熟してきて、黄色になるんだろうが、定めて奇麗だろ。今でももう半分色の変つたのがある。婆さんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、旨い蜜柑だそうだ。今に熟たら、たんと召し上がりと云つたから、毎日少しづつ食つてやろう。もう三週間もしたら、充分食えるだろ。まさか三週間以内にここを去る事もなかろう。

おれが蜜柑の事を考へてゐるところへ、偶然山嵐が話しにやつて來た。今日は祝勝会だから、君といつしよにご馳走を食おうと思つて牛肉を買つて來たと、竹の皮の包を袂から引きずり出して、座敷の真中へ抛り出した。おれは下宿で芋責豆腐責になつてゐる、蕎麦屋行き、団子屋行きを禁じられてる際だから、そいつは結構だと、すぐ婆さんから鍋と砂糖をかり込んで、煮方に取りしかつた。

山嵐は無暗に牛肉を頬張りながら、君あの赤シャツが芸者に馴染のある事を知つてゐるかと聞くから、知つてるとも、この間うらなりの送別会の時に來た一人がそつたと云つたら、そつた僕はこの頃ようやく勘づいたのに、君はなかなか敏捷だと大いにほめた。

「あいつは、ふた言目には品性だの、精神的娯楽だと云う癖に、裏へ廻って、芸者と関係なんかつけとる、怪しからん奴だ。それもほかの人が遊ぶのを寛容するならいいが、君が蕎麦屋へ行つたり、団子屋へはいるのさえ取締上書になると云つて、校長の口を通して注意を加えたじゃないか」

「うん、あの野郎の考えじや芸者買は精神的娯楽で、天麩羅や、団子は物理的娯楽なんだろう。精神的娯楽なら、もつと大べらにやるがいい。何だあの様は。馴染の芸者がはいつてくると、入れ代りに席をはずして、逃げるなんて、どこまでも人を胡魔化す氣だから気に食わない。そうして人が攻撃すると、僕は知らないとか、露西亞文学だとか、俳句が新体詩の兄弟分だと云つて、人を烟に捲くつもりなんだ。あんな弱虫は男じやないよ。全く御殿女中の生れ変りか何かだぜ。ことによると、あいつのおやじは湯島のかげまかもしれない」

「湯島のかげまた何だ」

「何でも男らしくないもんだろう。——君そこのところはまだ煮えていないぜ。そんなのを食うと條虫が湧くぜ」

「そうか、大抵大丈夫だろう。それで赤シャツは人に隠れて、温泉の町の角屋へ行つて、芸者と会見するそうだ」

「角屋つて、あの宿屋か」

「宿屋兼料理屋さ。だからあいつを一番へこますためには、あいつが芸者をつれて、あすこへはいり込むところを見届けておいて面詰するんだね」

「見届けるつて、夜番でもするのかい」

「うん、角屋の前に枡屋という宿屋があるだろう。あの表二階をかりて、障子へ穴をあけて、見ているのさ」「見ているときに入るかい」

「来るだろう。どうせひと晩じやいけない。一週間ばかりやるつもりでなくつちや」

「随分疲れるぜ。僕あ、おやじの死ぬとき一週間ばかり徹夜して看病した事があるが、あとでぼんやりして、大いに弱った事がある」「少しごらい身体が疲れたつて構わんさ。あんな奸物をあのままにしておくと、日本のためにならないから、僕が天に代つて誅戮を加えるんだ」

「愉快だ。そう事が極まれば、おれも加勢してやる。それで今夜から夜番をやるのかい」

「まだ枠屋に懸合つてないから、今夜は駄目だ」

「それじや、いつから始めるつもりだい」

「近々のうちやるさ。いずれ君に報知をするから、そうしたら、加勢してくれたまえ」

「よろしい、いつでも加勢する。僕は計略は下手だが、喧嘩とくるとこれでなかなかすばしこいぜ」

おれと山嵐がしきりに赤シャツ退治の計略を相談していると、宿の婆さんが出て来て、学校の生徒さんが一人、堀田先生にお目にかかりたいてお出でたぞなもし。今お宅へ参じたのじやが、お留守じやけれ、大方ここじやろうてて捜し当ててお出でたのじやがなもしと、闇の所へ膝を突いて山嵐の返事を待つて。山嵐はそうですかと玄関まで出て行つたが、やがて帰つて来て、君、生徒が祝勝会の余興を見に行かないかつて誘いに来たんだ。今日は高知から、何とか踊りをしに、わざわざここまで多人数乗り込んで来ているのだから、是非見物しろ、めつたに見られない踊だというんだ、君もいつしょに行つてみたまえと山嵐は大いに乗り気で、おれに同行を勧める。おれは蹠なら東京でたくさん見ている。毎年八幡様のお祭りには屋台が町内へ廻つてくるんだから汐酌みでも何でもちやんと心得ている。土佐っぽの馬鹿蹠なんか、見たくもないと思つたけれども、せつかく山嵐が勧めるもんだから、つい行く気になつて門へ出た。山嵐を誘いに来たものは誰かと思つたら赤シャツの弟だ。妙な奴が来たもんだ。

会場へはいると、回向院の相撲か本門寺の御会式のように幾旒となく長い旗を所々に植え付けた上に、世界万国の国旗をことごとく借りて來たくらい、縄から縄、綱から綱へ渡しかけて、大きな空が、いつになく賑やかに見える。東の隅に一夜作りの舞台を設けて、ここでいわゆる高知の何とか踊りをやるんだそうだ。舞台を右へ半町ばかりくると葭簀の囲いをして、活花が陳列してある。みんなが感心して眺めているが、一向くだらないものだ。あんなに草や竹を曲げて嬉しがるなら、背虫の色男や、跛の亭主を持つて自慢するがよからう。

舞台とは反対の方面で、しきりに花火を揚げる。花火の中から風船が出た。帝国万歳とかいてある。天主の松の上をふわふわ飛んで當所のなかへ落ちた。次はぼんと音がして、黒い団子が、しようと秋の空を射抜くように揚がると、それがおれの頭の上で、ばかりと割れて、青い煙が傘の骨のように開いて、だらだらと空中に流れ込んだ。風船がまた上がつた。今度は陸海軍万歳と赤地に白く染め抜いた奴が風に揺られて、温泉の町から、相生村の方へ飛んでいった。大方觀音様の境内へでも落ちたろう。式の時はさほどでもなかつたが、今度は大変な人出だ。田舎にもこんなに人間が住んでるかと驚いたぐらいうじやうじやして

いる。利口な顔はあまり見当らないが、数から云うとたしかに馬鹿に出来ない。そのうち評判の高知の何とか踊が始まつた。踊というから藤間か何ぞのやる踊りかと早合点していたが、これは大間違いであった。

いかめしい後鉢巻をして、立つ付け袴を穿いた男が十人ばかりずつ、舞台の上に三列に並んで、その三十人がことごとく抜き身を携げてゐるには魂消た。前列と後列の間はわずか一尺五寸ぐらいだろう、左右の間隔はそれより短いとも長くはない。たつた一人列を離れて舞台の端に立つてゐるのがあるばかりだ。この仲間外れの男は袴だけはつけてゐるが、後鉢巻は僨約して、抜身の代りに、胸へ太鼓を懸けてゐる。太鼓は太神樂の太鼓と同じ物だ。この男がやがて、いやあ、はああと呑氣な声を出して、妙な謡をうたいながら、太鼓をぼこぼん、ぼこぼんと叩く。歌の調子は前代未聞の不思議なものだ。三河万歳と普陀洛やの合併したものと思えば大した間違いにはならない。

歌はすこぶる悠長なもので、夏分の水飴のように、だらしがないが、匁切りをとるためにぼこぼんを入れるから、のべつのようでも拍子は取れる。この拍子に応じて三十人の抜き身がぴかぴかと光るのだが、これはまたすこぶる迅速なお手際で、拝見しても冷々する。隣りも後ろも一尺五寸以内に生きた人間が居て、その人間がまた切れる抜き身を自分と同じように振り舞わすのだから、よほど調子が揃わなければ、同志撃を始めて怪我をする事になる。それも動かないで刀だけ前後とか上下とかに振るのなら、まだ危険もないが、三十人が一度に足踏みをして横を向く時がある。ぐるりと廻る事がある。膝を曲げる事がある。隣りのものが一秒でも早過ぎるか、遅過ぎれば、自分の鼻は落ちるかも知れない。隣りの頭はそがれるかも知れない。抜き身の動くのは自由自在だが、その動く範囲は一尺五寸角の柱のうちにかぎられた上に、前後左右のものと同方向に同速度にひらめかなければならない。こいつは驚いた、なかなかもつて汐酌や闘の戸の及ぶところでない。聞いてみると、これははなはだ熟練の入るもので容易な事では、こういう風に調子が合わないそうだ。ことにむずかしいのは、かの万歳節のぼこぼん先生だそうだ。三十人の足の運びも、手の働きも、腰の曲げ方も、ことごとくこのぼこぼん君の拍子一つで極まるのだそうだ。傍で見ていると、この大将が一番呑氣そうに、いやあ、はああと気楽にうたつてゐるが、その実ははなはだ責任が重くつて非常に骨が折れることは不思議なものだ。

おれと山嵐が感心のあまりこの踊を余念なく見物していると、半町ばかり、向うの方で急にわッと云う鬨の声がして、今まで穏やかに諸所を縦覧していた連中が、にわかに波を打つて、右左りに搖き始める。喧嘩だ喧嘩だと云う声がすると思うと、人の袖を潜り抜けて來た赤シャツの弟が、先生また喧嘩です、中学の方で、今朝の意趣返しをするんで、また師範の奴と決戦を始めたとこ